

第八章 助詞論

一

助詞といふものは、種々の相關々係に立つ觀念語の下に添へて其の文法的機能を指標せんが爲の文法語である。觀念語が斷止し連續して種々の言粗密波を展開する道程に於て、その切點結節に介入し言語の文法的活動を顯現助成する獨自な外附的添加語片である。それは節を形成する爲の言語材料である。後置的成節素である。

節を形成するといふことは如何なることであるか。所與的な語は言語活動の單なる材料に過ぎない。家を建てるに就いての木材とか石材煉瓦の如きものに過ぎない。言語活動の素材であり、言主の腦中に横並びする潜在體系である。かやうなものが此の行動的社會に顯現し、言語活動として心的交渉の媒介作用物となる爲には、縦並び的に線條化されなければならぬ。空間的なものが時間的なものに轉移されなければならぬ。靜態的なものが動態的なものに生れ出でなければならぬ。そこに所與的材料的な語は、何等か別な姿を執らなければならぬのである。先づ潜在體系的連帶から解放せられ、此の行動的社會に放出されるといふことがなければならぬ。横並び的な結紐から逸脱して、縦並び的な體制を執らなければならぬ。しかし縦並び的といつても、語が只時軸に沿つて並列して行くのであれば、それは斷片的な原始語文の次續の外何ものでもない。感叫的語音の逐次的射出の如きものに過ぎない。

勿論そこには正當な文の生誕を見ることが出来る。文の本質形態はかやうなところに先づ求めなければならぬ。文は單なる判斷的形態ではなく、かゝる判斷をも包括するものとして、先づ斷止の形態でなければならぬ。しかし、それは單なる語文の如きものに過ぎない。たゞ語彙の世界に直面するものとして文法活動の圏外を臨むものである。そこには未だ文法事實などといふことも現れることなく、謂はゞ語即文、文即語であつて、語彙と立言との間が直接的である。語は文對當語であり、文は語文である。かやうな斷片的孤立的言語狀態に於て、文法事實の成立する契機は何であるか。それはかゝる片斷個々のものが連續するといふことに外ならない。しかし單に連續するといふことならば、又元の單一に還ることに外ならない。例へば二つの個々が單に連續してしまへば、一つの個となるより外はない。故にそこには矢張斷止的な意味がなければならぬ。連續の裡に斷止が生きてゐなければならぬ。相矛盾する斷止と連續とが一となつてゐなければならぬ。勿論單なる斷止ではなく、又單なる連續でもなく、兩者が相補的に一となつた意味のものが成立してゐなければならぬ。單なる斷止は原本的文の成立因であるが、かかる斷止を超え、斷止の表に斷止と一となれる連續が成立してゐなければならぬ。分析綜合的全一と言つたものが成立してゐなければならぬ。正當なる意味での句はかやうなものでなければならぬ。しかもそれは二單位累加相として種々雜多のものがある。言語の二單位的連續結體が句であり、之を累加すれば種々の複合句が成立して行くのである。此處に於て句の成素として言語の連續形態があり、之に對し文の成素として言語の斷止形態があるのである。かゝる句又は文の成立素として所與的材料語により形成せられたるものを節と稱するのである。故に節は形成的現示的言語であり、文法の第一義はかやうな節形成にある。語を語彙的言語とすれば、節は文法的言語であ

る。文や句の成立に對し語は間接的要素であるが、節はその直接的要素である。

助詞はかやうな節形成工作の材料語である。節を成立せしめる文法語である。文法語には種々のものがあるが、先づ第一義的な成節素とも言ふべきものと、第二義的な成語素とも言ふべきものとに區別しなければならぬ。従來は助詞を靜辭、助動詞を動辭などと言ひ、助詞助動詞を同一範類的なものとして考へられてゐたが、私はそれは少し粗漏ではないかと思ふ。勿論觀念語に對する文法語、詞に對する辭としては同類的であるが、それを單なる活用の有無などといふ如きことを以て靜辭とか動辭とかといふやうに考へて行つてはならぬ。已に活用論に於ても述べた如く、助詞は助動詞などに近寄せるよりも、寧ろ活用と共に一應考へらるべきものでなければならぬ。活用といふことは非獨立的な語尾の變化現象であり、而もそれは陳述語に於てのみ自生する言語形態であるが、眞の文法機能から言へば助詞と共に成節的なものでなければならぬ。活用形などといふことはかゝる活用により節を成す範疇に外ならぬ。助詞はかやうな活用現象に近寄せてみることにより、其の眞の文法機能を知ることが出来ると思ふ。とは言へ又、助詞は活用と同様なものと考へることも出来ない。助詞をどこまでも活用的方向へ考へて行つてはならぬ。嘗て上田萬年博士が、それは勿論挿語的であつたが、日本語の名詞代名詞にも例へば

〔僕〕

boku-a

boku-n

boku-ni

boku-o

などのやうに、恰も西洋語の屈折の如きものを考へられないこともないと、話されたことがある。助詞添加に對し斯くまでに考へ得るといふのは、一面助詞は助動詞などとは異なるものであり、却つて活用と同類的なものである

といふことを示すものであるが、かやうな想像をどこまでも延展して行つてはならない。しかし之を助動詞などと同列的に取扱ひ、靜辭とか體辭などと稱して抽象的な概念框に押込めるよりも、所謂不活用語に屈折的圖式の如きものを構造的に描いて行く方が、方法的に極めて煩雜であるが、勇敢で遙かに即實的であると思ふ。

助詞は成節素として種々の觀念語に後行するものであるが、節形成には必ずしも助詞を添へなければならぬといふものでもない。勿論節の性質によつて然るべき助詞を必ず添へなければならぬものもある。しかしそれとても、よく考へて見ると、添へられた助詞は常に補助的副用的である。例へば

よく讀めばわかる。

長ければ切ります。

待たれるとも待つ身になるな。

遅くとも十日に來る。

などの接續助詞「ば」「とも」は必須的であるが、それは單に補助的に必須的なのであつて、本體は先行陳述語の活用_に在るのである。又

机の上_に在る。

大阪へ行く。

空から舞下りる。

筆で書く。

などの補格助詞「に」「へ」「から」「で」も必須的であるが、それは補格の特殊相を表示する爲のものとして必要なのであつて、補格の本體は常に先行名詞に在るのである。之に反して同じく節の形成因素であるが、活用の方は何等かそれ相應の形態をとらなければ文法機能が絶対に發現しない性質のものである。動詞や形容詞は、活用によつてその文法力を開示し、活用によつて種々の文法形態が展開して行くのである。名詞とか從屬語などといふものは、活用などと言つた自律的形態を殊更分出することなき裸體的觀念語である。名詞の如きは然るべき語順に置かるれば、實質形態の指標を俟つことなく直ちに相應の文法力を開示し、又從屬語の如く機能領域の狭小なるものは、已にそれが決定的である。然るに動詞とか形容詞とかといふ陳述語は先づ自動的に活用的形態によつて自身の文法力を開示するものであり、謂はゞ活用に包まれたる觀念語である。故に活用事實は、動詞形容詞などにとつては運命的成節素であると言はなければならぬ。それは名詞や從屬語等で、ゼロ形質的に裸體的に開示せられるものに比せらるべきものである。例へば

花咲き鳥啼く。

僕いやだ。これ買ふ。

自然さうなる。そろ／＼お出で。

是非参ります。

の如きものと

花咲き、鳥啼く。

白い壁

どこへなりと行け。

の如きものと比照せらるべきものである。助詞の添加する眞の地點は、かやうな不活用語のゼロ形質の形態及び活用語の活用的形態であるとしなければならぬ。助詞は單に名詞とか動詞とかといふものに添はるのではなく、その形態部に副次的補助的なものとして添加するのである。随つて活用は成節素の第一次的なものであり、助詞添加はその第二次的なものと考へなければならぬ。

かやうなことから、助詞は一面に於て獨立せる成節素として觀念語に對し文法語といふ一郭を劃してゐるのである。活用とか屈折とかいふ如き觀念語の一部分を成すものではなく、或は附屬的辭でもなく、言語材料として觀念語に相對的である。随つて、相互に代用可能である。例へば

花が咲く。 本を讀む。

の「が」「を」をそのまま抽象して

鳥が啼く。 字を書く。

の如く、自由に使用して行くことが出来る。然るに活用語の活用形態はその語から取外して他に流用することは出来ない。勿論、活段的に範疇づけることは出来るが、それとは別である。しかしかやうなことを以て又、助動詞などと同様に考へようとしてはならぬ。助動詞は複語尾とまで謂はれてゐる如く、膠着したる先行動詞と一體となり、主要な文法機能は總てこの助動詞語尾に於て引受ける性質のものである。しかも助動詞は文法活動の直接要素とも見るべき節を形成するものではなく、かゝる節の資料である語を形成するものである。助詞と助動詞とは面を異に

せる文法語でなければならぬ。故にその獨立性といふことも斯く異なる兩者の立場を確と持した上で認めて行かなければならぬ。それを單に兩者が獨立的のものであるといふことを以て、直ちに兩者の範疇的同一へ飛躍してはならぬ。助詞は成節素の獨立的なものであり、助動詞は成語素の獨立的なものである。

しかし助詞は獨立的であると言つても、前置詞などのやうに殆んど觀念語に對立的となつてゐるものでもない。と言つて又、屈折現象の如く單なる語の部分でもない。後置詞でもなく、後行部でもない。謂はゞ、英語などの前置詞と屈折語尾との中間に位する程度のものであつて、冠詞などと略々同等に考へらるべきものである。所謂、脚結である。又支那語の助字と似た點もあるが、それよりも遙かに文法機能の中樞部に喰入つて居り、且極めて複雑多岐なる機構を有してゐる。單なる文法的な語彙ではなく、一つの組織を形成してゐる。かゝる助詞組織の真相を究めることは、日本語形態論の一大中心問題でなければならぬ。日本語の助詞は個別的には前置詞などに比し依屬的であるが、組織として機構態として觀念語に對立的である。それは恰も前置詞と屈折現象とを兼ね備へたる如き意味のものである。かやうな意味から日本語の助詞は世界の如何なる言語のかゝる添着素的なものにも増して重要であり、又特異的である。随つて初學者にとつて最も困難とされるところであり、我が國文法學史の略に先づ現れたものは手爾波研究であるが、その大部分を成すものは矢張此の助詞の把握作業であつた。殊にこの助詞が積極的要素となつて審美的文法とも稱すべきものが別に成立して居り、かやうな點から考へて助詞の研究といふものは、實に古往今來日本文法學の運命を決定するものであると言つて差支ない。

所記的には形態素、能記的には後行素、或は辭とか手爾波とか脚結などと稱せられる文法活動標示の實質語片は節の形成素と語の形成素とに分けることが出来、助詞はその前者に屬するものである。後置的成節素である。成節素には助詞と共に活用があるが、活用は附庸的分泌的であるに對し、助詞は獨立的外附的である。それだけに又活用は一次的であり助詞は二次的である。しかし其の組織的な點に於て助詞は決して活用に劣るものでなく、殊に日本語の助詞は他の如何なる言語に於ける添着素にも比して機構性である。故に之を單に文法的語彙として辭書的に説明し去らるべきものでなく、然るべき範類を求め、組織として認識し、どこまでも其の機構態を明かにするところがなければならぬ。

助詞の類別に就き從來種々に行はれたのであるが、その最も有力な根據と目せられるものは、添加せられる先行觀念語の範疇に依據せんとするものと、その標示機能に依るものである。前者の代表的ものは大槻文彦博士の次の分類法である。

第一類 名詞のみに屬くもの

(1) が、の (2) の、が、つ

(3) に (4) を

(5) と、と (6) へ

(7) より (8) まで

第二類 種々の語につくもの

(9) は、ば (10) も

(11) ぞ、なむ、なも、し (12)こそ

(13) だに、すら (14)さへ

(15) のみ、ばかり (16)や、か

第三類 動詞にのみ属くもの

(17) ば (18)と、とも、ど、ども

(19) に、を、が (20)て にて、とて、して
にして、として

(21) で (22)つつ

(廣日本文典・一六三頁——一六四頁)

後、三矢重松博士は右の第二類の種々の語につくものの中へ、感動詞の一部と考へられてゐた「よ」「や」「かな」等を加へて之を踏襲せられてから漸次一般に行はれるやうになつたものである。かやうにその助詞が如何なる觀念語に添加せられるものであるかといふことは、後行素としての助詞認識にとつて價值ある考へ方であつて、夙く富士谷成章なども其の脚結抄に於て「何や」「何よ」「何な」「何かな」などとして常に之に就き配意してゐたのである。しかし翻つて考へてみるに、助詞の添加せられる地點は單なる語そのものではなくて、語が將に然るべき文法

機能が発現せんとする地點でなければならぬ。語が資料的境地を超え、言語活動の直接的要素である節に轉出せんとする、一定の態勢に對して添加せられるのである。一體助詞添加によつて然々の文法機能を標示するといふのは、それ自體に於てかゝる文法機能を具有し之を先行觀念語に貼附する如きことを言ふのではない。それは成語的手段である。例へば名詞根に動詞性の接尾辭を膠着せしめて新動詞を形成する如きことである。成節法といふのは文法機能の發現を誘導する手續でなければならぬ。添加助詞そのものには然々の文法機能が存するのではなく、かゝる文法機能の主體である先行語に添へられることによつて之を指標し、その能記物たり得るに過ぎない。勿論、助詞にはそれ自身の自律的意義をも具有してゐる。しかし、成節素としては先行觀念語の文法機能を開發し、之が能記物たり得るに過ぎないのである。隨つて名詞とか動詞とかといふものに添加せられるといふのは、それ／＼の語そのものではなく、語の特定の文法機能に對しその能記物として添加せられるのである。斯くて助詞はその文法機能を所記として持ち、そこに新たな記號物が成立し、この支援によつて先行の語が節に轉出する譯である。かやうに助詞は語に添加せられるやうに見えても、其の實は語の有すべき一定の文法機能に關係を結ぶのであつて、語實體とは直接に關係なきものである。故に助詞を單に名詞につくとか動詞につくとかと言つた様に、先行語の範疇に依つてしては、之を徹底的に類別することが出来ないものである。上掲大槻博士の分類の如く漠然たるものとならざるを得ないのである。隨つてそれは個々の助詞の排列に於て見られる如く、何等かの方途により其の類別の不徹底を補綴して行かなければならぬものである。斯くて廣日本文典別記に於て次の如き細別を試みられたのである。

第一類 文主ヲ指示スルモノ。

が、の

二名詞ヲ繋グモノ。

の、が

事物ヲ處分スルモノ。

に、を、と

事物ノ方向ヲ示スモノ。

へ、より、から、で

第二類

分合スルモノ。

は、も

指定スルモノ。

ぞ、なむ、こそ

引證スルモノ。

だに、すら、さへ

限ルモノ。

のみ、ばかり

疑フモノ。

や、か

第三類

豫想スルモノ。

ば

抑ヘテ意ヲ翻スルモノ。

と、とも、ど、ども

意ノ裏返ルモノ。

に、を、が

終リテ移ルモノ。

て、で、つゝ

しかし、「場合に因りて各語に種々の異義を生ずれば、これを以て定義とはしがたし。」とあるやうに殆んど語義的説明と、五十歩百歩のものであるが、兎も角個々の助詞をその標示機能によつて區別しようとしてゐるのである。しかしてかやうな方向を一段と進め、先づ最も玉石混淆の嫌ある第二類を切崩し始めたのが吉岡郷甫氏であつた。それは文語對照語法に於て

第一類の助詞

體言又は體言に準ずるものに附いて他の語句に對する關係を定めるもの。

第二類の助詞

種々の語に附いて種々の意趣を表すもの。

第三類の助詞

用言を根帶とする語句に附いて他の語句と接續するもの。

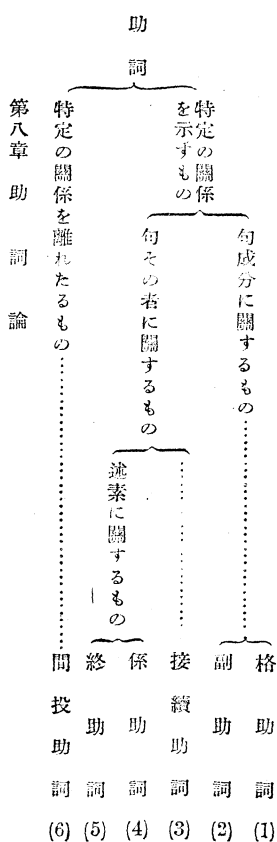
第四類の助詞

文の末の用言又は文の中の種々の語に附いて疑問を表し、文の末の用言に附いて命令又は願望を表すもの。

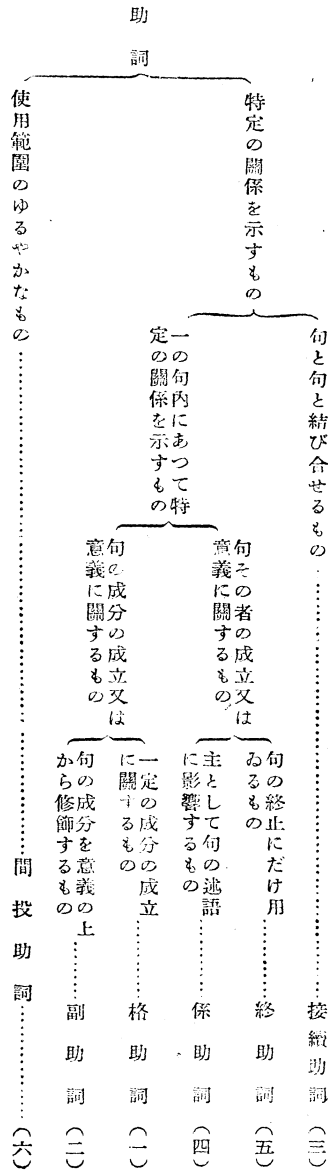
第五類の助詞

文の末又は中に置いて語調を整へ、語勢を與へ餘情を添へるに用ひられるもの。

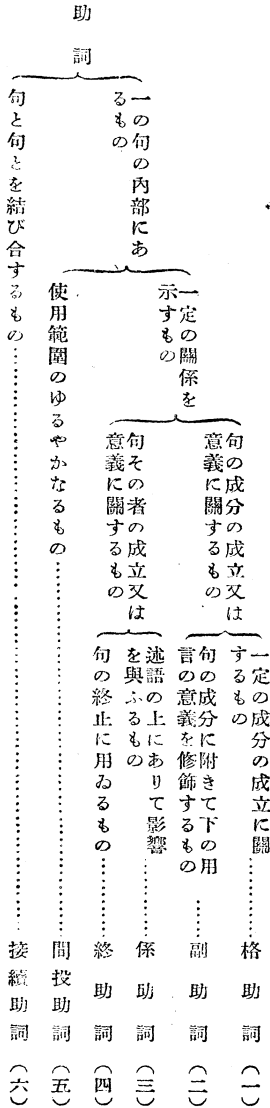
の如く五類に分け、その中第四類と第五類とは第二類より分封せる新しい範類である。勿論それは過渡的なものに過ぎず、未だ事實性に透徹しないものであつたが、一方山田孝雄博士はかゝる吉岡氏の進めた如き方向を更に徹底せしめられ實に秩序整然たる助詞組織を示されてゐたのである。先づ「余が今こゝになさむとする分類は従來行はれたる如き意義を主眼としての穿鑿にあらずして其の職能即示す所の關係を以て分釋の原理とし之に參ふるに意義を以てしたり。」と言ひその根本原理を示され、次の如く分類せられた。



右は日本文法論（五五一頁）のものであるが、後日本口語法講義（一四二頁）に於て示されたものはそれを一段と明化されてある。



しかし最近の日本文法學概論（四〇四頁）には



の如く改訂せられ、博士の説かれる句論の精神を透徹せられてあるのである。かくて吉岡氏の立てた五類が山田博士によつて

(一) 格助詞 の、が、を、に、と、へ、より、から、で

(二) 副助詞 だに、すら、さへ、のみ、ばかり、まで、など、やら、だけ、ぐらゐ

(三) 接續助詞 ば、と、とも、ど、ども、が、に、を、ところが、のに、ものを、も、し、と、けれど、

けれども

(四) 係助詞 は、も、ぞ、なむ、こそ、や、か、な、さへ、でも、ほか、しか

(五) 終助詞 が、がな、か、かな、かし、さ、え、ぜ、い、な、とも

(六) 間投助詞 よ、や、し、を、な、ね、ぞ

の如く、六類とされたのである。しかして右の中最も特筆大書さるべき事柄は吉岡氏の第四類の如きものの中から係助詞を擧げて一類を立てられたことである。此の係助詞の定立といふことは、一見何でもない事のやうではあるが、實は助詞研究に眼目を入れるに等しく、それは單に助詞の一類を新に増加したといふ如き意味のものではなく、我が國の助詞研究史上に一新紀元を劃したものと言つてよい程のものである。此の係助詞定立の爲、助詞機構の知的組織全面が引緊り、引いては論理的文法の全體系に於ける挾雜物が排除せられ、更にかゝる論理的文法認識を媒介として古典的文法或は歌學的文法として成立して來て居つた審美的文法ともいふべきものを甦生せしめる氣運を醸したのである。世間では往々にしてかゝる係助詞の眞義を理解することが出來ず、殊に山田文法を内々利用

し乍ら、此の係助詞を出したり引込めたりしてゐるのは滑稽至極である。

山田博士の助詞分類に對する一般の難點は、關係と意義との二つの見地を交錯して行はれてゐるといふことにある。しかし之は誰が言出したといふこともなしに只傳説的に然言はれてゐるだけで、堂々論陣を張り進んで自家の合理體系を明示せんとした人は未だないのである。只橋本進吉博士は國語法要説（國語科學講座）に於て

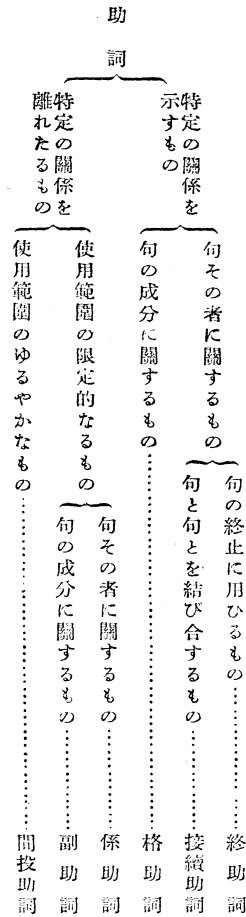


の如き分類を試みて居られる。言ふまでもなく之は辭の中に活用的な助動詞と不活用的な助動詞とを先づ分類せられ、かくて斷續關係といふ一元的原理を以て助詞を分類し盡さんとせられたもので、態度としては極めて徹底したもの

と言はなければならぬ。しかし斷續の意味なきものと標せられたものを、何故に又斷續關係を以て考へて行かれたのであらうか。先づ了解に苦しむ所である。かやうなことから、斷續の意味なき筈の間投助詞は終助詞と共に切れるものの中に配せられ、係助詞は格助詞などと共に續くものの中に配せられ、組織のあちらこちらに只便宜的に分散せられてゐるのである。

之は即ち山田博士が關係に意義を交へて分類せられたと反對の意味で難點があるのである。斷續關係のメスを以てすべからざるもの、或は然する必要なものに之を振るつたが爲其の分類が隙間だらけになつてしまつたのである。勿論山田博士の如く關係とか職能とか稱せられる文法機能の指標と、それ以外に助詞自身が有する意義とを混同して分類を立てゝはならぬ。さらばと言つて橋本博士の如く、一旦斷續の意味なきものと標し乍ら、尙も執拗にそれにしも斷續を求めて行つてはならぬ。その極、却つて斷續の眞義が失はれてしまふ結果となるのである。斷續の意味無しと定めたら、次に斷續以外の二次的意味を求め之を以て分類を進めて行かなければならぬ。かやうな點から考へて、山田博士が最初日本文法論に於て立てられたものの方が却つて妥當なのではなからうか。随つて私は最近の日本文法學概論の分類には餘り賛成出来ないのである。特定の關係を離れたるもの、或は使用範圍のゆるやかなるものとせられる間投助詞は飽くまで他と別でなければならぬ。更に言へば、橋本博士が副助詞を斷續の意味なきものとせられたやうに、之も特定の關係を離れたるものの一部として考へなければならぬ。又係助詞は所謂係結關係に於て連續的なものであつて文や句の直接的成立因ではない。審美的文法機構に於て中心的ものであるが、論理的文法機構では二次的周邊的なものと言はなければならぬ。故に之も特定の關係を離れたるものの一部として

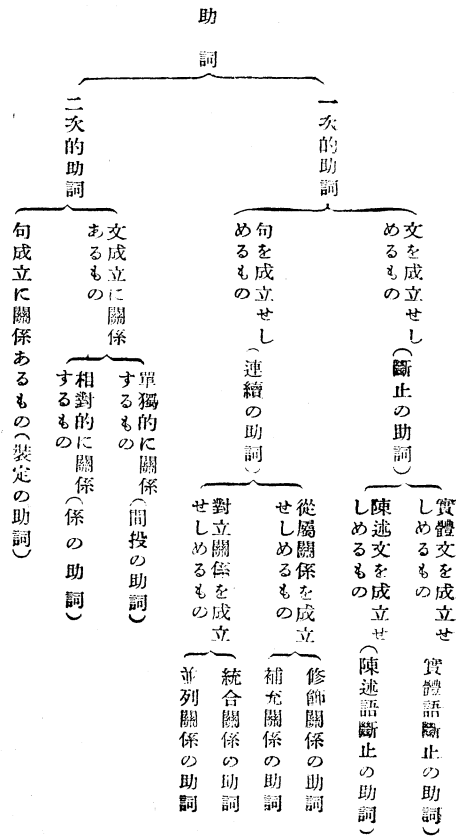
考へなければならぬ。こゝに山田博士の分類を基礎として試案を立つれば、略々次の如くなるのでなからうか。



しかし特定の關係を示すものといふのは、橋本博士の斷續を示すものである。言語の斷止連續の粗密相を示すものである。かやうなことは如何なることであるか。それは度々言及したるが如く節を成すことに外ならぬ。節を成し、文を成立せしめ句を形造ることに外ならぬ。節の斷止が文の根基となり、節の連續が句の結目となる。しかし之に對し、かゝる斷續法に直接關係なき副次的のものが特定の關係を離れたるものに外ならぬ。隨つて前者は成節素としての助詞の第一次なるものであり、後者は第二次的なものと言はなければならぬ。或は直接的に節を成すもの、間接的に節を成すものなどと區別してもよい。次に第一次的な直接的成節の助詞には斷止して文を成立せしめるものと連續して句を成立せしめるものがある譯である。切れるものつゞくもの、或は成文素成句素である。成文素としての助詞は終助詞であり、成句素としての助詞は格助詞と接續助詞とである。しかし終助詞、格助詞、接續助詞と稱せられるものにも種々のものがある。その中、成文素にはその成立せしめる文の種類によつて、實體

文を成立せしめるものと陳述文を成立せしめるものとある。一體、總て文は實體語斷止或は陳述語斷止によつて成立して行くのであるが、其の上更に特殊な性質の文を成立せしめんとする場合には、それ相應の助詞を添加するのである。しかし助詞を添加すると言つても、文成立に關係なく、只表情とか語調とか扮飾とかと言つた副次的必要から添加せられたるものは成文素としての助詞ではない。所謂、終助詞は文を眞に終結せしめる性質のものでなければならぬ。文を眞に生産する地點となるもの、文の本質部位を完成するものでなければならぬ。かやうなものが實體文では文語の希望を成立せしめる「が」「がな」であり、陳述文では命令を成立もしめる「よ」「い」「ろ」などと、疑問禁制確言等特殊な終止を成立せしめる「か」「や」「ぞ」「な」「とも」「ぜ」「さ」「は」「ぞ」「かし」などとである。以上のやうな成文素に對する成句素、即ち先行素を後行素に續ける爲の助詞に就いては、從來名詞所屬のもの動詞所屬のもの、更に進んでは格助詞接續助詞といふやうに考へられて來た。又橋本博士は接續助詞に對し並立助詞といふものを立てられ、格助詞に對し準副體助詞といふものを立てゝ居られる。かやうな傾向は如何なることを意味するか。それは所屬先行素に依る分類より、次第に文法機能そのものの標示性に徹底して行かうとしてゐるものに外ならぬ。即ち單に名詞とか動詞とか其の他の語につくといふのではなく、それが如何なる文法的必要から添へられるかといふことに依つて格助詞接續助詞などといふ名目が立てられ、斯くて更に文法機能によつて考へる方向へ進んで行けば、其の標示機能の細別により種々のものが考へられて行くのである。しかし橋本博士のものは、種々の點に於て未だ不完全と言はなければならぬ。連續關係によつて分類しようとせられながら未だ從來のものに拘泥されて居り、且連續關係そのものを明確に把持されてゐないところから分類が形式的に終つてゐる

のである。先づ所屬先行素の範疇意識を排除し、而して連續關係の實質にどこまでも觸れて行かなければならぬ。連續關係といふのは度々言及したやうに、先行素が後行素に従屬する從屬關係と、先行素が後行素に對結する對立關係との二に先づ區別することが出来る。しかして前者の從屬關係には先行素が後行素を修飾限定する修飾關係と、先行素が後行素を補足充實する補充關係とが區別せられ、後者の對立關係には先行素が後行素に矛盾的結合をする統合關係と、先行素が後行素に並列する並列關係とに區別せられる。以上修飾關係、補充關係、統合關係、並列關係の四關係方式に對し、それぞれ然るべき連續の助詞が配屬せられるのである。しかしそれらは更に細別して行かなければならぬ。次に第二次的なる間接的成節の助詞は、先づ常に文の全面に影響を及ぼし文成立に關係あるものと、先行素が後行素に關係する地點を意義的に裝定化裁し句成立にのみ關係あるものとに區別することが出来る。前者は言語斷止により文が成立するに當つて主として表情的に之を修飾し曲折せしめる力ある助詞、文に對する助詞である。後者は言語連續により句が成立するに當つて主として意義的に之を修飾し強化する力ある助詞、句に對する助詞である。後者は所謂副助詞であるが前者は更に二に分れる。即ち單獨的に間投せられ使用範圍のゆるやかなものと、結に對する係として相對的にのみ行はれ使用範圍の限定的なものである。一は間投の助詞であり他は係の助詞である。以上助詞分類に對する私見は大略次の如くである。



三

助詞は文法語であり、しかも活用と共に第一次的形態素としての文法語である。形態素とか文法語とかといふものの使命はそれ自身の實質、即ち能記所記の自律的聯合は二義的で、第一義は先行素の文法機能を示しその能記物となるといふことにあるのである。先行素に接合することにより、其の先行素から放射する文法機能の中然るべきものを所記と選び自身その能記となつて、そこに新しい聯合體を形造るのであるが、節といふものはかゝる文法

工作によつて成立するものである。しかし助詞は自身獨立的な形態素である。先行素に外附する手順を介してその使命を果すべき文法語である。随つて一般にかゝる成節素としての一義的な性質の外に、二義的な自律的記號性を多分に持つことが出来るのである。その餘り助詞には第一義的なものよりも寧ろ第二義的なものの方に傾き、種々の表情性とか意義性とかといふことを以て先行素に添加せられるものが成立してゐるのである。しかしかやうなものと雖も成節素としての本義を失ふものではない。二義的なものに傾せられ間接的とはなつてゐるが、矢張一種の成節素として考へて行かなければならぬものである。斯くて助詞には一次的なもの、或は直接的成節素としてのもの間接的成節素としてのものと言つた區別が先づ行はれなければならないのである。一次的助詞二次的助詞それ〴〵に、文成立に關するものと句成立に關するものがある。即ち一次的助詞には、言連鎖をそこで斷止せしめ種々の文を成立せしめんが爲に添加する助詞と、之に反し言連鎖を連續せしめ種々の句を結體せしめんが爲に添加する助詞とがあるのであり、而してそれに連れて二次的助詞にも、文成立の全面に影響を及ぼす助詞と、句の成立點にのみ影響を及ぼす助詞とがあるのである。文を大別して實體語斷止の實體文と、陳述語斷止の陳述文とがある。こゝに於て成文素としての一次的助詞には實體文を成立せしめる助詞と、陳述文を成立せしめる助詞とがある譯である。句の結體は修飾、補充、統合、並列の四關係方式を大綱として行はれる。そこにそれ〴〵の連續關係を成立せしめる助詞があるのである。かやうな一次的助詞に對する二次的助詞にも、亦それ相應の種類分けがある。其の中句の成立に關するものは裝定の助詞であるが、文成立に關するものには文中然るべき地點に間投し其の文の表情性に何等かの影響を與へる間投の助詞と、文中に係結の關係を生ぜしめ其の文の勢を曲折し表情性を強化せ

んとする係の助詞とがあるのである。以上のやうな第一次的第二次的な種々の助詞に對し今少しく詳細な考察を加へてみよう。

文の成立に就いては、度々言及する如く言語斷止といふことがなければならぬ。詞がそこで切れるといふことがなければならぬ。しかしてかゝる詞が切れるといふことは、語彙的言語狀態にあつては單に語を放出すればよいのであるが、文法的言語狀態に於ては常に何等かの形態を執らねばならぬ。即ち節を成さねばならぬ。しかし形態を執り節を成すといつても、語そのものが自動的内生的に然することの出来る場合もある。例へば

花が咲く。 六時に起きる。

金がある。 雲の色が美しい。

の如く、陳述語の活用によるものである。右は陳述文の場合であるが、實體文に於ては

太郎、お前そこで何してゐるんだ。

諸君、文學とは何であるか。

櫻花、散りかひくもれ。

の如く實體語がゼロ形態を以てすることができる。

太郎や……諸君よ……

の「や」「よ」などは二次的に加へられた助詞で、それが無くても言語斷止の本質は何等變化がないのである。又あゝ、山中の青葉の美しさよ。

言語道斷の大膽さよ。

いとかく夜をだに明したまはぬ苦しげさよ。

あはれの御物語や。

の如き感嘆の場合はその特徴は寧ろ實體語に先行する修飾の部分にあるのであるから、添加せられる「よ」「や」等の助詞は尙更二次的であると言はねばならぬ。しかし或種の文を成すには、斷止する節が外附的な助詞を必須要素として要求する場合がある。かやうな場合に添加する助詞を成文案としての助詞といふのである。その最も顯著なものは、文語に行はれる希望的實體文構成の助詞「が」「がな」である、しかして之には希望の對象物を表示する語が實體語の場合と準體的なものである場合とある。前者の場合には

老いず死なすの藥もが。

君が八千代にあふよしもがな。

の如く、その實體語が目的格に立つものと

天飛ぶ鳥にもがも。

人の心を枕ともがも。

飛ぶが如くに都へもがも。

の如く、その實體語が種々の補格に立つものとがある。後者の場合には
かひがねをさやにも見しが。

いかでこのかぐや姫を得てしがな。

の如く肯定的なものと

世の中にさらぬわかれのなくもがな。

いとかく朽木になしはてずもがな。

の如く否定的なものがある。感嘆的實體文に於ける「か」「かな」「かも」等は、希望的實體文に於ける「が」「がな」の如く必須的ではないが、他の場合に用ひられることなく、殊に種々複雑な感嘆的實體文を成立せしめる因ともなるものであるから、希望的實體文構成の助詞に準じ感嘆的實體文構成の助詞と見なければならぬ。しかして之には

玉にもぬける春の柳か。

とどむべきものとはなしにはかなくもちる花ごとにたぐふ心か。

おぼつかなくも呼子鳥かな。

浮びたる錦のもみち綾にして氷とちたる池の面かな。

三笠の山に出でし月かも。

わたの原よせくる浪のしば／＼も見まくのほしき玉津島かも。

の如く、感嘆の對象物を示す語が實體語の場合と

うつせみの世にも似たるか櫻花さくと見しまにかつ散りにけり。

山縣に蒔ける菰菜も吉備人と共にし摘めば楽しくもあるか。(記・下)

年月の射るが如くもおもほゆるかな。

今朝啼くこゑのめづらしきかな。

あかときに名のり鳴くなるほとゝぎすいやめづらしく思ほゆるかも。(萬葉・十七ノ四〇八四)

間もなく思ほゆるかも。(齊明記)

の如く、感嘆の對象物を示す語が準體的なる場合とある。右は實體文成立に關する助詞であつたが、次に陳述文成立に關する助詞に就いて考察してみよう。そこで先づ注意しなければならぬことは、實體文成立に關する助詞は何れも文語に於て發達したものであるが、陳述文成立に關する助詞は口語に於て發達してゐることである。陳述文には終止法による終止的陳述文と、命令法による命令的陳述文とがある。しかして、終止的陳述文或は命令的陳述文に對し、何等か特殊な形態をとらしめんがために添加せられる助詞がそれ／＼終止的陳述文構成の助詞、命令的陳述文構成の助詞である。終止的陳述文構成の助詞と目すべきものは「さ」「ぜ」「とも」「え」の四であり、その中、「さ」「ぜ」「とも」は確言的であり「え」は疑問的である。「さ」は軽く指示して受け流す性質の助詞で、之には陳述語に添へる場合と實體語に添へる場合とがある。前者には

これから氣をつけるさ。

明日からは早く起るさ。

そんなことはどうでもよいさ。

それはなか／＼面白いさ。

の如く陳述語の終止形に添へるものと

私がさ。 花見にさ。 これをさ。 君からさ。

お祭だからさ。 さうさ。

の如く陳述語の略體に添へるものとある。後者にも

そこが妙さ。 知れた事さ。

それはその筈さ。 そのことさ。

行かうと行くまいと僕の勝手さ。

の如く正しく實體語に添へるものと

これは昨日僕が買つて來たのさ。

わたしも行きたいのさ。

そんなことを言ふのさ。

の如く實體語の省略體に添へるものとある。「ぜ」は念を押し相手をそゝのかす性質の助詞で、

花が咲くぜ。 これを君に上げるぜ。

どこにもありませんぜ。 もう出來たぜ。

それは／＼美しいぜ。 どうもあの人のしわがらしいぜ。

の如く常に陳述語の終止形に添へられる。「とも」は勿論然りの意を示し、強く主張する性質の助詞で

行くと。 よろしうございますとも。

さうですとも。讀めるとも。 廣いとも。

の如く常に陳述語の終止形に添へられる。「え」は軽く疑問を表す性質の助詞で、常に疑問的終止を成せるものに添へられるのである。しかして之には

なんだえ。 だれだえ。 どれだえ。 どこだえ。

なんと言つたえ。 だれがしたえ。

どれに定めたえ。 どこにあつたえ。

の如く、形式動詞「だ」助動詞「た」に直ちに添へられるものと

どうだ、面白かつたかえ。 もういゝかえ。

自信があるかえ。 もう一べん讀まうかえ。

の如く疑問の助詞「か」の下に添へられるものとある。次に命令的陳述文構成の助詞は「い」「ろ」の二である。その中「い」は

それを早く持つてこい。 来い、来い、白来い。

まあこちらの方にせい。

の如く主として三段活用命令形に添へられるのであるが、又

さうしてくれい。 この問題を解いて見い。

の如く一段活用の命令形に添へられることもある。「ろ」は

もう一ぺん言つてみる。 いそいでたべろ。

早く起きろ。

の如く一段活用の命令形に添へられるものと

こちらの方にしろ。 早くしろ。

の如く左行三段活用の連用形に添へられるものとある。

以上で文を成立せしめる斷止の助詞につき一亘り考察してみたのであるが、この外に言語斷止に添へることによつて種々の文を成立せしめる助詞は多數にある。例へば「は」「も」「ぞ」「なむ」「こそ」「や」「か」「な」或は「よ」「や」「を」「ね」などの如きものがそれである。しかし、それらは文の成立素として特に發達した助詞ではない。

何れも二次的助詞であつて、それがたま／＼文末に置かれ種々の文を成立せしめるのである。即ち係の助詞とか間投の助詞とかといふものの、用法の一つと考へなければならぬものである。係の助詞や間投の助詞は句間に置かれることもあるが、一旦文末に置かれた場合には恰も文の成立素の如き機能を果すのである。殊に分析的な係の助詞に於て一層その傾向が強い。之等の事は又、その箇所で考察することとして、次に文成立の助詞の大要を掲げて置く。

文を成立せしめる助詞（斷止の助詞）

實體文を成立せしめる助詞（實體語斷止の助詞）
陳述文を成立せしめる助詞（陳述語斷止の助詞）

希望的實體文構成の助詞
感嘆的實體文構成の助詞
命令的陳述文構成の助詞

終止的陳述文構成の助詞

疑問的
確言的

が・がな

か・かな・かも

い・ろ

え

さ・ぜ・とも

四

句が成立するといふことは、文成立に反し斷止せんとするものを支へて之を連續せしめることである。先行素が後行素に言語的につゞくことである。かゝる先行素を支へ後行素につゞける働をする形態素の一つとして、句成立の助詞があるのである。随つてかゝる句成立の助詞は、連續關係の方式に沿ひ先づ修飾關係の助詞、補充關係の助詞、統合關係の助詞、並列關係の助詞の四つに大別することが出来るのである。右の中修飾關係の助詞は、修飾せんとする要素が修飾せんとする要素に先行するに際し、兩要素の性質關係に應じて用ひられる助詞である。之には先づ被修飾素の性質により連體的修飾の助詞と、連用的修飾の助詞とに區別する。前者は言ふまでもなく被修飾素が實體語である場合の修飾關係の助詞であり、後者は被修飾素が陳述語である場合の修飾關係の助詞である。連體的修飾關係の助詞は「の」或は「が」であるが、之は主として先行の修飾素が實體語である場合に行はれるのである。先づ「の」から眺める。その根幹的用法は

花の色　　櫻の花　　私の學校

君の本　　一の鳥居　　三の宮

日光の秋

の如く、先行修飾素と後行被修飾素とが共に實體語であるものである。この場合後行の實體語を省略し「の」で其の存在を暗示してゐることがある。例へば

上の君の下のが僕のだ。

誰のが一番よいか。

向かふのを呉れ。

とかくいひて前の守も今のも諸共におりて今のあるじも前のも手とりかはしてゑひごとに心よげなることして出でにけり。(土佐)

唐のもやまとのもかきけがし(源氏・葵)

の如きものである。又此の「の」で後行實體語を代理させてゐる形のものもある。例へば

これは僕のものでそれは弟のものである。

誰のが一番よいか。

八重櫻の咲くのは春の末である。

長いの方がよい。

君の方が強い。

人妻とわがのとふたつ思ふにはなれこし袖はあはれまされり（好忠集）

の如きものである。又古くは

風まじり雨ふる夜の雨まじり雪ふる夜は（萬葉・五ノ八九二）

につゝじのにははむ時のさくら花咲きなむ時に（萬葉・六ノ九七一）

わしり出のよろしき山のいでたちのくはしき山ぞ（萬葉・十三ノ三三三）

の如き用法もあつた。以上の如き先行修飾素が實體語であるものの外に、先行修飾素が陳述語殊に動詞である場合もある。例へば

梅花を賞するの記

一世を驚かすの事業を成し遂げむと心がけむたり。

百折撓まざるの決心を以て従事したり。

君やこむ我やゆかむのいざよひに

見せむの心ありければ

の如きものである。しかし之は文語に限られ、用法も狭く、謂はゞ準體言的取扱である。右の陳述語を省略した形のもので、補充素に直ちに「の」が添へられ修飾素となるものがある。例へば

印度との貿易　兄よりの手紙

大阪からの歸途 三越での買物

京までへの道中 ここだけの話

私にだけの氣遣 君への手紙

の如きものである。又從屬語が先行修飾素である場合に用ひられることもある。例へば

尤もの話 もしもの事 是非の用向

不當の要求 理想の社會 自然の成行

の如きものである。之に準じて考へらるべきものとして

多くの場合 遠くの親類 近くの他人

の如く、形容詞の連用形に添へられる「の」がある。次に、「が」は「の」に比し著しく用例が局限せられてゐる。言ふまでもなく實體語が修飾素となる場合にのみ用ひられるもので、それには次の如きものがある。

我が國 我が父 我が學校

誰が玉章 誰が子 己が罪

余が親友 汝が輩 君が代

梅が枝 淺茅が原 賤が家居

三が一 駒が岳

又古代では「の」「が」の外に「つ」「だ」「な」なども行はれてゐた。例へば

やつ子 晝つ方 前つ君 天つ風

木だもの 毛だもの 手な木 ぬなと

の如きものである。以上は連體的修飾の助詞であるが、之に對し連用的修飾の助詞として「に」と「と」がある。

この「に」と「と」は從屬語殊に狀態的從屬語が修飾素に立つ場合に添へられるものであるが、その中「に」は

靜かに物語る。 のどかに晴れる。

懇切に世話をする。 勇敢に戦ふ。

切に思ふ。 優に收容し得る。

の如く、形容詞志久活の觀念内容に略々相當する情緒的な狀態的從屬語に添へられ、「と」は

からりと晴れる。 さら／＼と流れる。

ばつと消えた。 さあつと復習する。

淋漓としたる。 倉皇と去る。

の如く、形容詞久活用の觀念内容に略々相當する感覺的な狀態的從屬語に添へられる。

補充關係の助詞は、補充素となるべき實體語に添へられ、所謂補格を形成するもので、之は極めて種類が多い。

それらを先づ、後行被補充素の缺如面を必須的に補充する補格を形成するものと、副次的に補充する補格を形成するものとに區別しなければならぬ。即ち必須的補格の助詞と副次的補格の助詞とである。必須的補格の助詞には

本を讀む。 字を書く。 花を折る。

志を遂げる。 天を仰ぐ。 着物を着る。

友を誘ふ。 人を憐む。 子を叱る。

自己を反省する。 心を痛める。 佛を信ずる。

人に金を貸す。 友に近況を知らせる。

軍人に勅語を賜ふ。 名士に物を聴く。

子供に着物を着せる。 大工に家を建てさせる。

賊に金品を強奪される。 子供に花を折られる。

馬を走らせる。 花を咲かせる。

子供に花を折らせる。 犬に檻を引かせる。

名士に物を聴かしめる。 村人に途を尋ねしめる。

の如き目的格の助詞「を」と

人に金を貸す。 子に財産を譲る。

父に進級を通知する。 娘に芝居を見せる。

子供が母に叱られる。 犬が子供に追はれる。

風に吹倒される。 とう／＼雨にふられた。

母が子に文字を教へる。 父が長子に財産を譲る。

子が母に文字を教へられる。　長子が父に財産を譲られる。

子供に着物を着せる。　生徒に本を読ませる。

教師が生徒に課業を受けさせる。

子が父から財産を譲られる。　子父より財産を譲らる。

の如き客格の助詞「に」「から」「より」とがある。次に副次的補格の助詞は、靜的なものと動的なものに大別する。一體、必須的補格は主體現象そのものの缺如を補充するものであるが、副次的補格は現象に對する環境を種々の角度視面から補充するものである。この意味に於て、副次的補格は環境格などと稱してもよい位のものである。しかして靜的補格といふのは、その現象に對する環境が靜止的であり、動的補格といふのはそれが移動的なものである。即ち一は植物的環境であり他は動物的環境である。靜的なものには内含的なものと外在的なものと別がある。内含的補格は、その示す環境が現象を内に安住せしめるものであり、外在的補格は、その示す環境が現象に對して外的に關與するものである。しかして内含的補格の助詞は

水に映る。　地上に落ちる。　東京に住む

机の上に本を置く。　森に啼く小鳥の囀

座布團に坐る。　東京驛に着く。

戦争に行く。　知らせに來る。

八時に目を醒ます。　昭和六年に卒業しました。

の如き「に」であるが、外在的補格の助詞には

君と相談する。 叔父と花見に行く。

この世を淨土とする。 甲を乙と一緒にする。

これを大化の新政と言ふ。 田中といふ人。

よほど苦しいと見える。 これにすると決めた。

あつと叫んで倒れた。 知らぬと言つて突撥ねた。

父とあがめる。 手足と頼む。

の如き「と」と

東京で賣捌く。 こゝで澤山です。

牛乳でバタをこしらへる。 鷹の羽ではいだ矢。

汽車で行く。 水で洗ふ。 雨で濡れた。

今日で丁度十日になる。

の如き「で」とがある。しかして「と」は現象と環境とが併存的であり、「で」は目的格に近く、環境の一角が現象の部分として含まれて行く、機縁的干涉的なものである。右靜的なものに對する動的なものには又、密着的なものと離脱的なものと別がある。密着的なものは現象の移動的領域を示すものであり、現象がかかる環境に對しどこまでも接着一して行はれるのであり、離脱的なものは現象の發動する因となるべき地點を示すものであり、現象が

第一の環境から第二の環境を志向して行はれるのである。前者の助詞は

郷里を去る。 山坂を上る。 川を溯る。

流を下る。 池を繞る。 大空を驅る。

市中を廻る。 海を渡る。 阻路を辿る。

の如き「を」であるが、後者には更に

大阪から來た。 母が臺所から呼びました。

こゝからは私の分だ。 私から始めませうか。

樟から樟腦をとる。 馬から下りる。

七月頃から旅行します。 去年から始めました。

目元より口元の方が似てゐる。

色よりも香こそあはれとおもほゆれ。

いわけなく宮の内より生ひ出でて

いとかめしうして此としかけの家のみへより詣で給ふ。(宇津保・俊蔭)

月よみの光を清み神島のいそみの浦ゆ船出すわれは。(萬葉・十五ノ三五九九)

畏きや命かゞふり明日ゆりやかえがむた寝むいむ無しにして。(同上・二十ノ四三二一)

大夫の清きその名を古よ今の現に流さへる……(同上・十八ノ四〇九四)

の如き「から」「より」……などと

東へ向かふ。 近くへ引越す。 前へ進め。

向岸へ渡る。 谷底へ落ちる。 天上へ昇る。

の如き「へ」とを區別しなければならぬ。しかして「から」「より」などは現象の出自起點を示すものであり、かやうなことから此の助詞は受身の客格に使用せられ、又「より」は「に」と共に狀態觀念に對して、その比較對照の基準となる補格を形成するためにも用ひられるのである。「へ」は現象の移動する方向を示すものであり、隨つて之は「から」と「に」との中間に位するものといつてよい。

統合關係の助詞には、主語面の主位觀念を特立するためのものと、述語面の賓位觀念を指示するためのものとある。即ち統合關係は主語と述語との矛盾的結合であるが、その主格を析出するものが前者であり、後者は更に述格中に於て賓格を析出するものである。前者の中、奈良朝文獻、殊に宣命などの上に表れてゐる「藤原朝臣麿伊」「敬福伊」などの「い」は最も純粹なものと思はれるが、現在では全く化石語となつてしまつてゐる。そこで現行語に於て最も盛に行はれてゐる主格表示の助詞といへば

花が咲く。 鳥が啼く。 雨が降る。

風が吹くだらう。 橋が架けられる。

壁が白い。 姿が美しい。 それがよからう。

の如き「が」であり、「の」は

花の咲く枝　人の言ふこと

梅の枝に鶯の鳴くのはよいものだ。

の如く、從屬句の主格を示すもののみに行はれる。文語では

ひとりして物を思へば秋の田のいなばのそよといふ人のなき。

みよしのゝ山のしら雪ふみ分けて入りにし人の音づれもせぬ。

うめの花見にこそきつれうぐひすのひとく／＼といとひしをる。

の如く、文の主格を示すものとして行はれてゐるが、併しそれは常に表情的咏嘆的な場合である。賓位觀念を示すものは

文學は人生の縮圖である。

こゝは東京驛である。

あれは私のものです。

この花は實に綺麗である。

君は又信仰上の修養に不用意の人ではありませんでした。

小生が西郷吉之助でござる。

これは一豊の馬でございます。

日の出る方は東で、日の入る方は西です。

の如き「で」が口語に於て行はれ、古くは

天地の神なきものにあらばこそ……

しかそれさる事に侍り。

御氣嫌如何に御座候や。

汝宿業拙くして今生貧しき身と有り。

の如き「に」「と」も行はれた。

並列關係の助詞には先づ、實體語相互の並列を表示するものと、陳述語相互の並列を表示するものがある。前者は連體的並列の助詞、後者は連用的並列の助詞である。連體的並列の助詞は合同的なものと枚舉的なものとに分つ。合同的並列の助詞には

東京と大阪と名古屋と……

史記と漢書との列傳

あなたと私の關係

の如き與同的な「と」と

あなたにわたくしにこの方にすべて三人です。

月に叢雲花に風。 竹に雀、牡丹に唐獅子。

の如き累加的の「に」とがある。枚舉的並列の助詞は更に單純的なものと複合的なものとに區別する。單純枚舉の

助詞は

牛乳は蛋白質や澱粉や脂肪を含んでゐる。

ねだんの高いのや安いのやいろ／＼ある。

なにとなく花や紅葉を見るほどに春と秋とはいくめぐりしつ（風雅・十七）

久かたとは月や空などをこそよめれ。（童蒙抄）

の如き「や」、或は

花だの月だのといふ遊びごとではない。

今更よいのわるいの何のかのいふ事は承知がならぬ。

死ぬの生きるのといふ騒をした。

の如き「の」である。複合枚擧の助詞は又、包含的なものと不定的なものに分つ。包含的枚擧の助詞は

お父さんにもいさんも丸山君も妹もお松もみんな下りた。

いろ／＼の虫はそつちにもこつちにも節おもしろく鳴いてゐる。

これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關。

の如き「も」である。不定的なものは更に選言的なものと遲疑的なものとに分つ。選言的枚擧の助詞は

君か僕かさへ承知すれば出来るのだ。

あれは梅か桃でせう。

讀みか書きかする。

雲か山か呉か越か。

の如き「か」、或は

君なり僕なりが承知すればよいのだ。

行くなり来るなり勝手にしろ。

の如き「なり」である。遲疑的枚擧の助詞は

何やらかやら譯がわからぬ。

犬やら狼やらわかりません。

踊るやら跳ねるやら大騒です。

おまへのやら私のやら色々まざつてゐる。

の如き「やら」、或は

我々はおのづから或物とか或事柄とかが自分に意識せられて居るとか居つたとかいふことを知つてゐる。

何とかかんとか言つてゐる。

の如き「とか」である。

次に連用的並列の助詞は、先づ單純に同格連用をなすものと、種々複雑な意味性を持つて前件後件が並列するものとに區別することができる。前者は重加的並列の助詞などとも稱すべきもので、之には時間的なものと超時間的

なものとあり、而して時間的なものは更に次續的なものと同時的なものとに區別することができる。次續的並列の助詞は「て」であるが、之は元來文語の連用形所接の助動詞「つ」の連用形であつたのが、その完了的な意味が次第に磨滅し、單に陳述を確める意味で同格連用の先行素に添へられるやうになつたものである。例へば

波瀾と上下して走る。 月芽えて雁高く飛ぶ。

春過ぎて夏來り秋往きて冬到る。

の如きものである。しかして更に

柄は短くても可なり。 花は紅にて葉は綠なり。

人知るまじとて欺くは妄なり。

の如く、形容詞や助詞の下にも行はれ、殊に口語では、この「て」が元の「つ」から全く孤立し、且「てけり」「てけむ」などといふやうに、他の助動詞を之に添へることができなくなつてゐる。さうして

子供が泣いてゐる。

夜は川下の方へ流れて曙の光は四邊に満ちてゐる。

人夫に擔がせて來た。

みんな喜んで遊んでゐる。

の如きものは勿論

嬉しくて嬉しくてたまらぬ。

こゝは水が浅くて舟を進めることが出来さうもない。

倫敦の冬は日が短くて霧が多くて誠に鬱陶しうございます。

の如きものや

泣いてみたとして仕様がなない。

の如きものが盛に行はれてゐるのである。同時的並列の助詞は

しかられながら笑つてゐる。

人に歌はせながら聞いてゐる。

これ程貧しい暮しをしてゐながらこんな大金が有るのになぜ今まで話さなかつた。

の如き「ながら」、或は主として文語に行はれる。

筑紫に侍りける時に罷り通ひつゝ碁うちける人

音羽山音に聞きつゝ逢坂の關のこなたに年をふるかな。

皆とくおきいでつゝ庭面をみる。(胡蝶日記)

の如き「つゝ」である。右三つの時間的なものは先行陳述語の連用形に添加せられるものであつたが、超時間的に重加並列せられるものは終止形に添へられるのである。それは

夏は涼しいし冬は暖い。

雨も降るし風も吹くし今日は止さう。

電話は不通だし郵便は遅いし仕様がない。

の如き「し」で、口語にのみ行はれるものである。

次に、種々複雑な意味を持つて前件と後件とが連結する關係を示す複合的並列の助詞は、綜合的傾向のものと分析的傾向のものとに先づ區別する。綜合的並列には、前件後件の輕重關係によつて、同等的なものと差等的なものがあり、後者は更に前件輕く後件重きものと前件重く後件輕きものとに分つ。前件後件同等的に綜合せられる並列の助詞は

風は寒いが天氣がよい。

私も知つてゐるが親切な人だ。

今日事なかりしが明日如何ならむ。

の如き「が」、或は

來たところが一人か二人だ。

昨日公園へ行つてみたところが花はもう散つてゐた。

さうはいふものの矢張我が子は可愛いのだ。

折角來たもののこれでは仕方がない。

忘れぬもののかれぬべらなり。

時鳥がなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから。

こめやとは思ふものからひぐらしの鳴く夕暮はたち待たれつゝ。

の如き「ところが」「ものの」「ものから」などである。前件軽く後件重き傾向の綜合並列の助詞は折もあらうに今急しい時にどうしたのだ。

試にこれを新聞紙の印刷に就いて考へてみるに若し之を木版に彫つて手刷にしたら勞力も非常に費用も亦夥しいものであらう。

庭のおもはまだかわかぬに夕だちの空さりげなくすめる月かな。(新古今・三)

秋の野のにしきのこともみゆるかな色なき露はそめじと思ふに。(後撰・七)

の如き「に」、或は

來いといふのにまだ來ない。

寒いのにひとへものを着てゐる。まだ早いのにもう歸るか。

の如き「のに」がある。前件重く後件輕き傾向の綜合並列の助詞は

夏の夜はまだよひながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ。(古今・三)

しら露の色はひとつをいかにして秋の木葉をちぎにそむらむ。(同・五)

つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを。(同・十六)

の如き文語に行はれる「を」、或は

醫者でさへなほせぬものをしやうがあるものか。

ねてゐても苦しいものを起きることはとてもできん。

人が親切するものをありがたいと思はぬ。

せずともよいことを餘計なことをした。

の如き「ものを」「ことを」などである。しかして以上の総合的並列の助詞は何れも先行陳述語の連體形に添へられる。分析的並列は先件が後件の明確な條件として關係するものであるから、條件並列とか條件連用とか條件法などと稱してもよいものである。之には、前件の後件に對する關係性により、先づ前件が後件の理由を言ふものと、前件後件が事實關係をなすものとに大別する。前者は理由條件並列であり、後者は更に繼起的關係の當然條件並列と必然的關係の必然條件並列に區別する。理由條件並列の助詞は

勉強するから學問が進む。

なまけるからいけないのだ。

おかしいから笑ふ。

かやうにいる／＼の影響があるから見る人によつて文學の批評も違ふ。

の如き「から」である。しかして之は常に先行陳述語の連體形に添へられ、口語にのみ用ひられるのである。當然條件並列の助詞は

雨が降ると涼しくなる。

早く行かぬと間に合はぬ。

あまり長いと折れる。

押されると倒れる。 家へ歸ると日が暮れた。

木から落ちると實が二つに割れた。

の如き「と」である。この「と」は

熟寢せしとに庭津鳥雞は啼くなり。(續體紀)

吾背子を莫越の山の喚子鳥きみ呼びかへせ夜の更けぬとに。 萬葉・十ノ一八二二

の如く、本來は時の意味の名詞であつたが

かひはかくありけるものをわびはてしぬる命をたすけやはせぬとかきはつると絶え入り給ひぬ。(竹取)

の如きものを經過し、今日に至つてゐるのである。故に之は連體形に添へられる助詞としなければならぬ。

必然條件の並列には順續的なものと屢續的なものがあり、それ／＼に又未然的なものと已然的なものがある。

その中、順續條件の助詞は「ば」であるが、

後患なくば僥倖のみ。

折りとらば惜しげにもあるか。

よくば參らう。 見たくば見ろ。

行かずばなるまい。

雪溪が冬の世界ならば此所は春の國でせう。

それだけのお金ならば私が差上げます。

静かならば寝つかれよう。

いやならば仕方がない。

そんな事を言ふならばこつちにも考がある。

若し一層早く列國に交つて居つたならば更に發達の跡が著しかつたであらう。

書いたらば渡しなさい。

行つたらばさう言つて呉れ。

の如く、先行陳述語の未然形に添へれば未然順續條件となり、

水清ければ大魚住ます。

一旦緩急あれば義勇公に奉ず。

泰山木の花咲きたれば來り見よ。

好きになればこそ上手になつた。

左様なれば頂戴いたさう。

静かなればこそこんな山にも住んでゐる。

昨日行つたれば居なかつた。

の如く、先行陳述語の已然形に添へれば已然順續條件となる。(しかし口語では、右の例の如く「なら」「たら」を

用ひるものは別として、同じく已然形に「ば」を添へる形のものでも、「讀めばわかる」「さうすればかうしてやる」「長ければ切ります」「見たければ見せてやる」の如く、一般陳述語に於けるものは已然順續ではなく、寧ろ假設的な未然順續である。）未然順續條件の助詞は「と」「とも」「も」であるが、その中、「と」「とも」は主として文語に行はれ、「も」は主として口語に行はれるのである。しかして「と」「とも」は

嵐のみ吹くめる宿の花薄穂に出でたりとかひやなからむ。

繪に書くと筆も及ばじ少女子が花の姿を誰に見せまし。

人は咎むと咎めじ人は怒ると怒らじ。

或は

せきいれたる名こそ流れてとまるとも絶えずみるべき瀧の糸かは。

こゝろこそちぎりしまゝにかはるとも同じ空なる月や見るらむ。

譏るとも苦しまじ舉むとも聞入れじ。

たとへ如何なる勞苦ありとも忍ばむ。

の如く、先行陳述語が動詞系のものでは終止形に添へられ

愛敬無くと言葉しなめきなどいへば……………

一字の悲字なくとも既に心動きて禁ぜざるものあらむ。

の如く、先行陳述語が形容詞系のものでは連用形に添へられる。口語でも

どんな事があらうと必ずやり遂げてみせる。

行かうと行くまいと僕の勝手だ

見てゐようと見てゐまいとやるべき事はやれ。

或は

待たれるとも待つ身になるな。

どこへ行くとも心のまゝだ。

どうするとも勝手にしなさい。

遅くとも十日に来るはずだ。

金は無くとも智慧さへあればよい。

の如く多少限られた範囲で行はれる。「も」は文語では

矢は當らざりしも痛手はおひぬ。(平治)

同じ御子豫王を立てられしもまた捨てゝ自ら位に即き給ふ。(神皇正統記)

人はいみじくたけくも力及ばぬことなりけり。(愚管抄)

の如く、先行陳述語が動詞系のものは連體形に、先行陳述語が形容詞系のものは連用形に添へ稀に行はれてゐるのであるが、口語では「でも」「ても」の形として盛に行はれてゐる。その中、「でも」は

顔は人でも心は鬼だ。

これでも本音を吐かぬ。

今は穩かでも安心できぬ。

うはべはどうでも中味は大切だ。

の如く實體語、從屬語を受け、「ても」は

誰がやつても同じ事だ。

少しぐらゐ高くても買ひませう。

御恩は死んでも忘れません。

讀んでも讀んでもわからぬ、

の如く、先行陳述語の連用形を受けるのである。已然戻續條件の助詞は、文語では

色は匂へど散りぬるを

青によし奈良の大路はゆきよけどこの山路はゆきあしかりけり。

の如き「ど」或は

口に言ふは易けれども實際に行ふは難し。

あやしき下腐なれども聖人の誠にかなへり。

の如き「ども」である。しかして之等は何れも先行陳述語の已然形に添加せられる。然るに口語では
わるいけれどこらへよう。

いやなんだけれど仕様がな。

ことわるけれど押して頼む。

或は

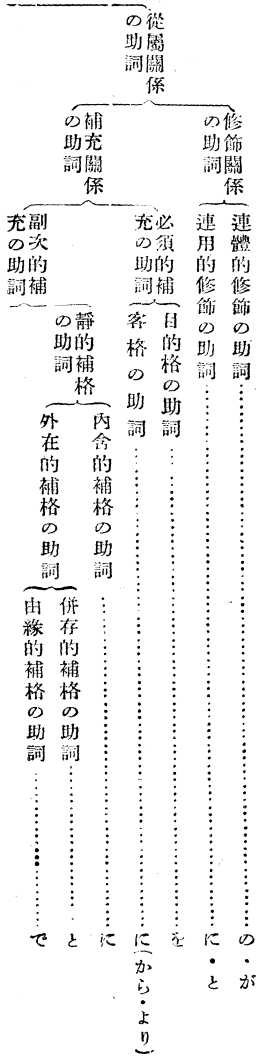
面白いけれどももう歸らねばなりません。

見たいけれども我慢しよう。

そんなことはあるまいけれどもどうも氣がかりでならぬ。

教へはするけれども自分で成可くおやりなさい。

の如く「けれど」「けれども」などの助詞が成立してゐる。この「けれど」「けれども」は、元來形容詞志久活の已然形に「ど」「ども」の添へられた語尾の獨立するに至つた助詞である。随つて常に先行陳述語の終止形に添へて行はれるのである。



句を成
立せし
める助
(連綴の
詞)

對立關係
の助詞

並列關係
の助詞

統合關係
の助詞
主格の助詞
賓格の助詞

連用的並
列の助詞

連體的並
列の助詞

複合的連
用の助詞

重加的連
用の助詞

枚舉的連
用の助詞

合體的連
用の助詞

動的補格
の助詞

密着的補格の助詞

離脫的補格の助詞

起點的補格の助詞
方向的補格の助詞

與同的並列の助詞
累加的並列の助詞

單純枚舉の助詞

複合枚舉
の助詞

包含的枚舉の助詞
不定的枚
舉の助詞
選言的枚舉の助詞
遲疑的枚舉の助詞

超時的連用の助詞

時性的連用の助詞

次續的連用の助詞
同時的連用の助詞

綜合的連
用の助詞

同等的連用の助詞
差等的連
用の助詞
後件重視の助詞
前件重視の助詞

分析的連
用の助詞

理由條件の助詞
事實條件
の助詞
當然條件の助詞
必然條件
の助詞
順續條件の助詞
展續條件
の助詞

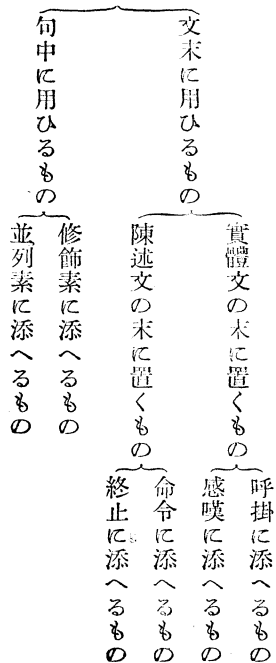
未然展續條
件の助詞
已然展續條
件の助詞
と・ども・けれ
ど・けれども

五

前二項では一次的助詞の太要を述べたのであるが、次に二次的助詞につき考察を加へてみよう。二次的助詞といふのは、一次的助詞が節の形成に對し直接的・一義的であるのに比し、間接的・二義的な節形成素である。即ち一義的に成立してゐる節に、意義的乃至は表情的な種々の扮飾を加へることによつて、節を二義的に成立せしめる助詞である。かゝる節扮飾が言語斷止に影響を及ぼすものと言語連續に影響を及ぼすものとある。前者は文の成立に關係ある助詞であり、後者は句の成立に關係ある助詞である。句の成立に關係ある助詞は副助詞とか裝定の助詞などと呼ばすべきものであるが、文の成立に關係ある助詞は更に二つに分れるのである。その一つは性質上綜合的であつて、單獨的に投入せられ使用範圍の比較的ゆるやかなものであり、今一つは性質上分析的であつて、斷止點と相對的に配置せられ使用範圍に一定の制限あるものである。前者は間投の助詞であり、後者は係の助詞である。

間投の助詞には、意義上多少客觀的で指定性あるものと、全然主觀的情意のみを表すものとの二種類がある。前者は「や」「よ」等の也行音、及び文語にのみ用ひられる「し」などであり、後者は「な」「ね」等の奈行音、上代語に於ける「を」「ゑ」等の和行音、及び文語にのみ用ひられる「かし」などである。先づ前者から考へて行かう。その中、指定力に就いていへば、「や」は稍々軽く「よ」は稍々重く、「し」は特殊な指定性を表すものである。「や」の用法は大略次の如くである。

「や」の用法



呼掛に添へる「や」は口語では

お松や、ちよつと用があるから、早く。

坊や、そつちへ行くのではありませんぞ。

一太郎やあい。

の如きものであり、文語では

げに아가君や、をさなの御物いひや。(源氏・寄木)

檀越や、しかもな言ひそ。(萬葉・十六ノ三八四七)

の如きものである。感嘆に「や」の添へられる場合は文語だけである。例へば

げに面白の景色や。 あはれの御物語や。

げに아가君や、をさなの御物いひや

三島江や、露もまだひぬあしの葉につのぐむほどの春風ぞ吹く。(新古今・二)
菊の香や、奈良には古き佛たち。

大原や、蝶の出で舞ふおぼろ月。

の如きものである。命令に添へられる「や」は口語では

それ見や。 引けや引けや。

早く来いや。 そんなことはやめろや。

の如きものであり、文語では

つゞけや者共。 うてやはやせや。

見よや。

の如きものである。終止に添へる「や」は口語では

僕知らないや。 僕欲しいや。

僕行きたいや。 それでいゝや。

もうかへらうや。 もうやめようや。

の如きものの外に

そんな無理をいふなや。

無茶なことするなや。

の如く禁制的終止に添へるものもある。しかし文語では

うれしや、たのしや。

更に筆投げつべしや。

氣上りてものも覺えぬや。

軒端も遠く見えたるぞや。

あなうらめしや。

の如く、單なる終止形に添へるもののみである。修飾素に添へるものは主として文語の用法で、それには連體的のものゝ連用的のものがある。しかして連體的のものには更に、先行素が實體語である場合と、陳述語である場合とがある。前者は

朝倉や木の丸殿

大原やをしほの山

近江のや鏡の山

の如きものであり、後者は

難波津にさくやこの花

押てるや難波

夕づく日さすや岡へ

蟋蟀鳴くや霜夜

の如きものである。連用的のものは、所謂副詞に添へる

さぞや面白からむ。

よしや免るとも

の如きもの、或は感動詞に添へる

やよやまで山郭公ことづてむ。

すはや一大事こそ出で來たれ。

いでや、この世に生れては願はしかるべき事こそ多かめれ。

の如きものがある。並列素に添加するものも主として文語で、いづれも連用的であるが、之には

天つ風ふくや錦の旗の手になびかぬ草はあらじと思ふ。

その始東京に來るや東西を辨ぜず。

或は

よの中はいかにやいかに。

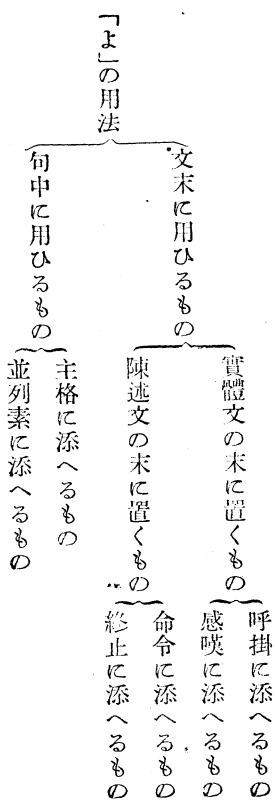
うしやうし、いとへやいとへ。

の如きものの外に

さ月來ば鳴きもふりなむ、時鳥まだしき程の聲を聞かばや。

あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや。

の如く、順續未然條件の形にこの「や」を添へて中止せしめ、願望を表す用法もある。
次に「よ」の用法は略々左の如くである。



呼掛に添へるものは多く文語で、例へば

苔の袂よ、かはきだにせよ。

まろがまろ寝よ、幾夜経ぬらむ。

少納言よ、香爐峯の雪はいかに。

の如きものである。感嘆に添へる「よ」は、口語では

あゝ、山中の青葉の美しさよ。

何と理解して呉れる人の少いことよ。

の如きものであり、文語では

いとかく夜をだに明したまはぬ苦しげさよ。

最後の姿を今一目みざりしことのくやしさよ。

の如きものである。命令に添へるものは文語口語共に盛に行はれてゐる。殊に文語では、

見よ。蹴よ。起きよ。受けよ。せよ。來よ。

の如く、一段系活用にあつては多くの場合、この「よ」を添へることにより命令形としての機能を全うするのである。しかし四段系のものでも

あひ思ひたまへよ。(源氏・空蟬)

せうとをみてのみはやまじと大納言に申せよ。(源氏・紅梅)

朝霧の思はむ所に猶さらばおぼししれよ。(源氏・夕霧)

あはれとだにおぼしおけよ。(源氏・藤袴)

の如く、「よ」を添へることができるのであり、又之に反して

大伴の遠つ神祖のおくつきはしるくしめたて人の知るべく。(萬葉・十八ノ四〇九六)

なでしこが花の盛にあひみしめとぞ。(同・十七ノ四〇〇八)

菅枕あぜかまかさむころせ手枕。(同・十四ノ三三六九)

沖邊なる白玉よせて沖つ白浪(同・九ノ一六六七)

の如く、古くは一段系のものでも「よ」を添加しないものも行はれたのであるから、「よ」を命令の助詞などと考へることはできない。口語では一層かやうな傾向が顯著である。故に

よんで見よ。 靜かにせよ。

少し讀ませよ。

の如く、一段系のものには勿論のこと

待てよ。 あつちへ行つて居れよ。

早く書けよ。 ごめんなさいよ。

の如く、四段系のものにも多くこの「よ」が添加せられ、更に

行つて來いよ。 靜かにしろよ。

の如く、命令の助詞「し」「ろ」の下に添はり、或は

お話して頂戴よ。 これ御覽よ。

の如く、命令の意ある動詞性の漢語に添へられるのである。終止に添へるものは口語では

前の方がよつぽどいゝよ。

もうなんにもないよ。

あとからきつと行くよ。

皆さんこれが目じるしだよ。

書いてしまつたよ。

そんなこともありませうよ。

の如きものであり、文語では稀に

忘れずよ又變らずよ。(後拾遺)

忘れじよ夢と契りし言の葉は(拾遺)

思はずよ越えて悔しき逢坂の(續後撰)

の如きものがあるが、多く

春の野に生ふるなきなのわびしきは身をつみてだに人のしらぬよ。

見るわれさへに心おのづから若やぐよ。

いかに年月の速かなるよ。 老いにけるよな。

どのやうに、連體形に添へられるのである。又口語にも文語にも

そんなことしなざるなよ。

もう來るなよ。

人ははや人なみなみにいでたちて沈みにしづむわれにあゆなよ。(源順集)

にくみ給ふなよと聞え給へば(源氏・霽標)

ひとり月なみたまひそよ。(源氏・寄木)

などの如く、禁制的終止にこの「よ」を添へるものがある。更に終止の陳述語を省略し

知れた事よ。 その通りよ。

こつちの方が長いよ。 どうならうとまゝよ。

なに少しばかりよ。

我こそは天下第一の名僧よ。

もえわたる我が身ぞふじの山よ。

或は

これがよ。 あそこによ。

私をよ。 京都からよ。 筆と紙とでよ。

の如く、賓格とか主格とか補格などに直ちに添へられるものもある。主格に添加するものは

まろがまろねよくよへぬらむ。

その文よいづらとのたまへど。

世の中よ道こそなけれ。

の如きもので、文語にのみ行はれるのである。並列素に添加するものは

さればよつひにあらはれたり。

さればよあらはなりつらむ。

の如きものであるが、外に口語文語共に

お話してよ。

餘り勉強するからよ。

あれして下さるならよ。

さらばよとわかれし時に（後撰）

よもあしくてよとみたけのたまはじとて（枕）

さればよと思ひあはせて（源氏・夕顔）

の如く、後行素の省略せられた形のものもある。

「し」は多少強く指定して調子を添へる助詞で、文語にのみ行はれ、且文末に用ひることなく専ら句中にのみ用ひられ、所謂休め詞としての用をなすものである。それは大略次の如くである。

「し」の用法

從屬關係の間へ投入するもの

修飾素に添へるもの

補充素に添へるもの

對立關係の間へ投入するもの

主格に添へるもの

並列素に添へるもの

修飾素に添へる「し」には連體的のものと連用的のものとある。前者は

誰しの人か知らざらむ。

の如きものであり、後者は

すべもなくさむくしあれば

間なくし降れば

あゆの風いたくし吹けば

うべし神世ゆはじめけらしも。

まそ鏡たゞにし妹を相見れば

の如きものである。補充素に添へる「し」は

戀をしこひばあはざらめかも。

島がくれ行く舟をしぞ思ふ。

之をし忍ぶべくんば何をか忍ぶべからざらむ。

これは物によりてほむるにしもあらず。

皇は神にしませば

まつとしきかば今かへりこむ。

我はさぶしも君とし在らねば。

の如く種々の場合がある。主格に添へるものは

種しあれば岩にも松は生ひにけり。

雪の摧けしそこに散りけむ。

一文字だに知らぬものし_レが足は十文字にふみてぞあそぶよ。

の如きものであり、並列素に添へる「し」は

露霜の置きてし來れば（萬葉・二ノ一三八）

道行く人も獨だに似てし行かねば（同・二ノ二〇七）

繼ぎてし聞けば心は惑ふ。（同・十二ノ二九六一）

沖つ白浪立ちしくらしも。（同・十五ノ三六五四）

の如き同格的連用の場合である。

以上は指定的間投の助詞であるが、次に表情的間投の助詞を考察する。それには先づ、主として口語に於て親愛の情を表すに用ひる奈行音の一系列がある。之は一般的に言つて奈行音總てに亘り得るものであるが、最も普通に行はれてゐるものは「ね」「な」或は「の」である。しかして間投の助詞中最も使用範圍のゆるやかなものといふべく、殆んどあらゆる種類の節に添加することができるのである。例へば

あなたね、どうかわたしの頼みをきいて下さいよ。

それがねほんたうにねこまるんですよ。

昨日上野へ行きましたらね櫻がよく咲いて居りましたねそれにね大變な人出でしてね……

しつかりやつて呉れよな。

昨日な君のところまで来てみたんだがな何だか立てこんでゐるやうだつたから引返したんだ。
そこでのわしの方からのかう言つてやつたがの……

の如きものである。文語でも古くはかやうなものが行はれてゐた。例へば

巨勢山のつらく棒つらくに見つゝ思ふな巨勢の春野を。萬葉・一ノ五四

明日よりは吾は戀ひむな……（同・九ノ一七七八）

花の色は移りにけりな……（古今・二）

契りきなかたみに袖をしぼりつゝ（後拾遺・十四）

とへかしなかつ藤の衣手に涙のかゝる秋のねづめを。（新古今・十五）

の如きものである。「を」も可成使用範圍の自由な助詞であるが、之は上代に於て盛に行はれたものである。例へば

皆人を、寢よとの鐘は打つなれど（萬葉・四ノ六〇七）

の如きものは呼掛に添へたものであり

八重垣造るその八重垣を。（記・上）

ねもごろに思ふ吾妹を。（萬葉・十ノ三一〇九）

の如きものは感嘆に添へたものであり

渡り守舟渡せをと呼ぶ聲の（萬葉・三ノ三四九）

宇治川を船渡せをと喚へども（同・七ノ一一三八）

の如きものは命令に添へたものであり

霰降り鹿島の神を祈りつゝ皇御軍に吾は來にしを。(萬葉・二十ノ四三七〇)

つひに行く道とはかねてきゝしかど、きのふけふとは思はざりしを。(古今・十六)

の如きものは終止に添へたものであり

伊勢をのあま

この世なる間は楽しくをあらな。(萬葉・三ノ三四九)

の如きものは修飾素に添へたものであり

父母も側はなさかり三枝の中にを寝むと(萬葉・五ノ九〇四)

別れなばうら悲しけむ吾が衣したにを著ませたどに逢ふまでに。(同・十五ノ三五八四)

漁する人とを見ませ。(同・九ノ一七二七)

犬上の鳥籠の山なるいさや川いさを聞こせ(同・十一ノ二七二〇)

人はいさ我は無き名の惜しければ昔も今も知らずとをいはむ。(古今・十三)

の如きものは補充素に添へたものであり

梅の花手折りを來つゝ遊ぶにあるべし。(萬葉・十九ノ四一七四)

萩が花散るらん小野の露霜にぬれてを行かむ小夜はふくとも。(古今・三)

心をし君に奉ると念へればよしこの頃は戀ひつゝをあらむ。萬葉・十一ノ二六〇三)

の如きものは並列素に添へたものである。かやうな「を」に關聯して

山の端に味鳥群騒ぎ行くなれど吾はさぶしゑ君にしあらねば。(萬葉・四ノ四八六)

上つ毛野佐野のくくだけ折り榮し吾は待たむゑことし來ずとも。(同・十四ノ三四〇六)

芹のもと吾は苦しゑ。(天智紀)

世の中は戀しげしゑや、斯くしあらば……(萬葉・五ノ八一九)

心はよしゑ君がまにまに。(同・十一ノ二五三七)

よしゑやし浦はなくとも、よしゑやし潟はなくとも(同・二ノ一三一)

の如き「ゑ」、或は

愛しき十羽の松原少子どもいざわ出で見む。(萬葉・十三ノ三三四六)

淡海の海にかづきせなわ。(記・中)

天神子召汝怡樂過。(神武紀)

の如き「わ」もあつたのである。

「かし」は「し」に對立し文語の特異な問投の助詞である。即ち「し」は句間にのみ用ひられるものであるが、之は文末にのみ用ひられるのである。しかし文末にのみ用ひられるといつても、文の成立素としての斷止の助詞ではない。それは只文末にのみ用ひられるといふだけで、それを用ひたからと言つて、何等之といふ特殊な文を成立させる譯のものではないのである。只軽く押へて咏めるに過ぎないのである。随つて

さは思ひつかし。

さても君忘れけりかし。

うちひそみぬかし。

人こそ心得ず思ひなげかむかし。

誠にあはれなりかし。

の如く終止の末に置かれる外に

戀しくば來ても見よかし。

とめこかし梅さかりなる我が宿を

くもれかし眺むるからに悲しさは

ふけかし風のふかであれかし。

とへかしななたしくふちの衣手に

の如く命令の末に置かれ、更に

去年の春の事ぞかし。

さてぞかし。

或は

な見たまひそかし。

の如く、「ぞ」とか「な——そ」で一旦明確に止めたものにも添へられるのである。

間投の助詞	
指定的間投の助詞	表情的間投の助詞
句中文末に用ひるもの……………や・よ	句中文末に用ひるもの……………な・ね・を・ゑ・わ
句中にのみ用ひるもの……………よ	文末にのみ用ひるもの……………かし

六

係の助詞は大局から見れば間投の助詞と類同じうするものでなければならぬ。それは文に對し全面的に影響を與へ、その成立に多かれ少かれ何等かの關係あるものである。勿論文成立に對し一義的に關係する性質のものではないが、已に成立せんとする文の或地點に添加せられることにより、之をしをらせ調子を改變せしめる性質のものである。文粗密波に干涉する意味のものである。故に從來この係の助詞を副助詞の如きものと同一類としてみたり、甚だしきは位格表示の助詞と混同したりしてゐたのは妄なりと言はねばならぬ。位格表示の助詞は勿論であるが、副助詞とか裝定の助詞とかと稱する一類は、句の成立に關係ある助詞で、文に對し何等影響を及ぼすことのないものである。然るに係の助詞は間投の助詞と共に、二次的ではあるが、必ず文の成立に或種の影響を及ぼすものである。ければならぬ。終助詞とか斷止の助詞とか稱するものは、文を直接に生産するために特に存在してゐる助詞であるが、係の助詞と間投の助詞とは、文を直接には生産しないが、かく生産せられて行かうとする文に何等かの表情的

扮飾を與へんとするものである。

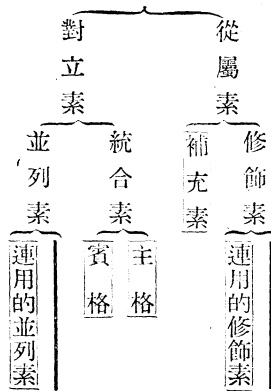
しかし、係の助詞は間投の助詞と勿論同一のものではない。類を同じうするものであるが、種を異にするものでなければならぬ。それは如何なる點に於て異なるのであるか。一體、間投の助詞といふ一類は言語の成立する當初から存在してゐたであらうが、係の助詞はその間に於て如何なる契機に因り成立したであらうか。之に就いて種々に考へられるであらうが、その中軸をなすものは陳述文の發達であると思ふ。陳述文が或程度の發達を遂げた時から、係の助詞が間投の助詞の如きものを母胎として成立しかけたのであると思ふ。文には種々雑多のものがある。

それは極めて邊緣的な感叫とか呼掛の如きものから實體文陳述文などといふものであるが、陳述文の發達は餘程知性の高度に達した時代からでなければならぬ。殊に我が國では外國文化を攝取しかけた頃からではないかと思はれる節がある。それはともかくやうな陳述文の發達が或程度にまで達した頃、我が國では係の助詞が成立しかけたものと思ふ。何が故に、陳述文に於て係の助が成立しなければならなかつたか。それは實體文などといふものは本來的に情意的表出體である。その中心體から表情的であり、知情意の總合體である。何も殊更その軀幹に對し表情的工作などを施す必要がないのである。然るに陳述文はかゝる總體的な文體から理智的方向に偏向し、情意的表出性を失はんとする方向のものである。しかし、かやうな偏向知性の陳述文が次第に文體としての主要な地位を占めるやうになり、多く之を以て立言せられるやうになると、やがて又その表情的缺如が感ぜられ、そこに種々の表情的工作が言語活動自體に於て外的或は内行的に行はれようとするのである。その外的表情工作の一つとして間投の助詞の添加が行はれるのであるが、内的表情工作として所謂係結の關係が成立するやうになつたのである。一體、

陳述文といふものは高度な理智的分析の介入せるものである。常に一が二になる過程をとる文體である。かやうな分析的な陳述文に於て内的表情工作が行はれるといふことは如何なることであるか。それはその表情的な工作そのものも陳述的となること、分析的となることではなければならぬ。單に表情的語片を間投するのではなく、陳述作用の分析的なるに従ひ工作自體も二對立的とならねばならぬ。かくして生まれたものが係と結との相關々係である。しかして結の方は述素の變形であるが、之に對する係は即ち係の助詞である。故に係の助詞は間投の助詞と異なり、常に陳述文に於て用ひられるものであり、而して結としての述素と相對的であり、隨つて分析的制限的である。

係の助詞は陳述文の分析的なるに従つて成立せる助詞であると言つても、その間投性を失ふものではない。間投性を全然失つてしまつたならば主格表示の助詞の如きものとなつてしまふであらう。從來「は」などは、ともすればさやうに見られてゐたこともあつた。一體、陳述文といふものは常に主述の統合をその軀幹とするものである。主語と述語との分析綜合過程を内容とするものである。今もし係の助詞が全く之に従ふとすれば、それは主語に添へられる助詞となるより仕方がないであらう。しかし、それでは係の助詞としての特殊機能が消滅して了ふのである。それこそ元の李阿彌である。こゝに於て言語的自然の攝理はこの間を功みに配濟し、一面陳述文の分析性に隨順せしめ乍ら他面間投性を失はしめてゐないのである。かくて係の助詞は主格には勿論添へられるのであるが、その他種々の關係の間に挿入せられるのである。例へば「花は咲く」と言ふ外に「美しくは咲かない」「こゝでは咲く」「咲きはしませう」などとも言ふことができるのである。しかし種々の關係とは言ふものの、連體的修飾とか連體的並列などといふ連體的なるものは、陳述文の本質に何等觸れるところのないものであるから、それらの關係

の間に係の助詞が置かれるやうなことは絶対にないのである。もしかゝる連體的のものゝ間に置くことがありとすれば、それは間投性への偏向乃至は間投の助詞へ墮して行くものであると言はねばならぬ。かやうに考へて行くと係の助詞の添へられる地點といふものは、大略次の如きものでなければならぬと思ふ。



係の助詞は上の如く、陳述文に於ける主格、賓格、種々の補充素、連用的修飾素、連用的並列素等の何れにも添へることができるのであるが、之には二つの極限を考へることができる。しかして係の助詞の添加は、この二つの極限の間に掲げた諸地點を辿り比較的自由に上下し得ることのできるものである。その二つの極とは如何なるものをいふのであるか。その第一は、結に對する係が陳述機構の外へ消失し、係の助詞が全然文面に表れないもの、即ち本居宣長の言を以てすれば「は・も・徒」の徒である。その第二は係が結を越え結の外へ逸脱し、係の助詞が述素に添へられてゐるものである。係結現象といふものは、係の助詞がこの二極の間を往來し結の述素に何等かの

影響を加へることに外ならぬ。故に眞の係助詞は、それがかゝる二極の間に在る場合でなければならぬ。そこで、第一の極である「徒」は係の助詞が表れないものであるからそれでよいとして、第二の極である結の外に係の助詞が表れるといふことは如何なることであるか。それは例へば

これは重いは。

げに面白かりけるは。

あまの小舟のつなでかなしも。

こはいづこへ行くべきぞ

さることあるべしや。

の如きものであるが、之を一面から考へれば、係の助詞の間投性の一つの表れとも見ることが出來よう。しかし

まろはさらにもいはぬ人ぞよ。

軒端も遠く見えたるぞや。

去年の春の事ぞかし。

君がすむやどのこすゑをゆくもかくるゝまでにかへりみしはや。

もちどりのかゝらはしもよ。

の如く、それが間投の助詞と重ねられる場合には必ず先行するのであるから、單なる間投性の表れと斷じ去ることできないのである。かやうなものを如何に考ふべきであらうか。私は之を寧ろ終助詞とか陳述斷止の助詞の如き

ものと略々同様に考へたいのである。係の助詞が陳述機構の上方へ

其の勢決然として攻むべき様ぞなき。

其の勢決然として攻むべき様なき。

其の勢決然として攻むべき様なき。

其の勢決然として攻むべき様なし。

の如く逸脱して行つたのが「徒」であり、之と反對に

其の勢決然として攻むべき様なきぞ。

の如く下方に逸脱し結に外接せるものが終助詞的であり、而して係結現象といふものは、時と場合によつてかゝる徒の極限と終助詞的極限との中間を縫つて上下するものと考へたいのである。

右の如く考へると、係の助詞は間投の助詞よりは稍々高度であり、陳述斷止の終助詞よりは稍々低度であり、謂はゞ兩助詞の略々中間に位するものであると考へてもよいと思ふ。然らば同じく二次的助詞である裝定の助詞とは如何なる關係があるか。勿論裝定の助詞とか副助詞とかといふものは句の成立に關係あるもので、之と類を異にするものであるが、二次的である點に於て共通的であるから一應それらの相關々係を考へて置かねばならぬのみならず、係の助詞は文の成立に關係するものであると言ひ條、その置かれる地點は文成立の原點から分離し、裝定の助詞と同様句の間であり、隨つてこの兩部が互に重なり合ふ様な場合が生ずるのである。かやうな場合に於て、係の助詞と裝定の助詞との先後如何といふことが必ず問題とならねばならぬ。それらのものがそれ／＼句結體に於け

る節の如何なる部分を形成するものであるかといふことが問はれなければならぬ。即ち節といふものは觀念部と文法部とから出来上つてゐる立言の要素であり、助詞添加は勿論その文法部の構成にあるのであるから節の後行的部分であるが、かゝる文法部とか後行的部分とかといふものの如何なる部位をそれ／＼分任するのであるかといふことを究めなければならぬ。それは先づ次の如き例により一目してわかるのである。

それだけは勘辨してくれ。

十圓ばかりはある。

私などはどうでもよい。

少々痛い／＼は我慢する。

牛らしい唸聲が往來までも聞える。

今年ばかりは墨染に咲け。

櫻花ちる間をだにもみるべきを。

こと人を目に近くだにぞみざりつる。

夜中までなむおはせし。

住江のゆきてさへこそみま／＼ほしけれ。

即ち常に係の助詞は装定の助詞の下へ來るのである。随つて係の助詞といふものは節の後行的文法構造の最末端に位するものと考へなければならぬ。かやうなことは如何なることを意味するのであるか。それは係の助詞が結の述

素に相呼應する必要からであると思ふ。勿論、間投の助詞がこの係の助詞と句間に於て重なる場合は

君はね向かふで見てゐて呉れ給へ。

あの方もね近頃は勝れないんですよ。

田中君さへな居てくれればこんな惨敗をしなかつたのに。

我はもや安見子得たり。

の如く更に下へ来る傾向があるのであるが、それは綜合的なもので彗星のやうに陳述機構の間を擦過して行く底のものである。然るに係の助詞が節の文法部の最末に來るといふことは結の述素に呼應するためであり、且結の述素が文の最末にあつて文面を引緊めてゐると同様に、それは節の最末に來て文面を引緊めてゐるのである。

以上の如き係の助詞には如何なるものがあるか。先づ之を指定的なものと禁制的なものに區別して考へなければならぬ。前者は一般に係の助詞と認められるものであるが、後者は所謂「なぞ」の格で極めて特殊なものである。

そこで前者の指定的なものから考察して行く。之には指定を主とするものと指定以外に他の意味あるものがある。指定を主とするものは更に排他的に指定するものと包含的に指定するものとに分つ。排他的に指定する係の助詞は「は」であるが、之は

夏は暑くて冬は寒い。

人には負けぬ。それとは違ふ。

慥には言はれぬ。下關へは行かぬ。

門からは出ない。　　これよりはよく。

それではない。　　書いては破る。

そればかりは勘辨してくれ。

これだけはどうしても言ふな。

國境までは行けぬ。　　君などはまだよい方だ。

或は

柳は緑にして花は紅なり。

人には告げよ海人の釣船。

行きをば止めぬ逢坂の

年毎にあふとはすれど

筑紫へは行かでこなたにとどまれり。

君はまだ遠くは行かじ。

我はもや安見子得たり。

これはし十人の子にていと五月にさへ生れてむづかしきなり。(大鐔・序)

釜ばしも引きぬかれなばいかにすべきぞ。(更科)

我はぞ戀ふる

妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものにぞありける。(萬葉・十五ノ三五九一)

の如く、口語文語共に用ひられ結は終止形をとる。「をば」「ばし」の「ば」は「は」の連濁せるもの。但し「ばし」は「をばし」の「を」の省略。)又

みんな濟んだは。銀行が年々殖えるは。

げに面白かりけるは。そは我も知り候ふは。

の如く終止にも用ひられる。

「は」よりも一段と排他的の意味の強いものに「しか」と「ほか」とがある。しかして之が結の述素は常に打消となるのである。何れも口語にのみ用ひられるものであるが、その中「しか」の方は「うへもしかなむ」「それしかあらじ」などの如き「然」から來たものらしく、かくて

あの方しかおいでになりません。

一つしか持つてゐません。

こゝにしかない。うそとしか思へぬ。

東京からしか來なかつた。

筆でしか書けぬ。

これだけしかない。京都までしか行かない。

僅かしか残つて居らぬ。たまにしか逢はない。

の如く、何れかといへば、そのものの指定に傾いてゐるのである。「ほか」は「より外」の變形で私ほか知りません。

この店には古いものほかない。

水ほか飲まぬ。

この品は銀座にほか賣つて居らぬ。

君からほか聞かぬ。 上へほか向かぬ。

筆でほか書かぬ。

これだけほかない。 これくらゐほか出来ぬ。

九時までほか待たれぬ。 まだ一度ほか會ひません。

の如く、「しか」に比して除外するものに傾いてゐる。

包含的に指定する係の助詞は「も」であるが、之は

これも好い。 聞くも恐ろしい話だ。

一寸觸れてもいけない。 こゝにもある。

私をも連て行つて下さい。

君んところへも寄らう。

そこからも出て來た。

君とも仲違ひしてしまつたか。

筆でも書ける。

これまでも度々話した通りだ。

君なども何とかしてやらねばならぬ。

或は

吾が宿は雪ふりしきて道もなし。(古今・六)

笛竹の聲のうちにも思ふこゝろあり。(後撰・十六)

卯花はくるれば月の影かとも見ゆ。(金葉・一)

戀しくば見てもしのばんもみちばを(古今・五)

むかしは又もかへりきなまし。(古今・十四)

をみなべしうしろめたくも見ゆるかな。(古今・四)

春霞何かくすらむ櫻花ちるまをだにも見るべきものを。(古今・二)

それ聖人は孔子だも居らず。

ことならば言の葉さへもきえななむ。(古今・十四)

鬼すらも都のうちと簀篁をぬぎてやこよひ人に見ゆらむ。(躬恒集)

又わがあやまちにのみもあらざりけり。(源氏・若菜)

の如く、口語文語共に行はれ結は終止形をとる。又文語では

行くへ知らずも。綱手かなしも。

驚なくも。かねて著しも。

の如く終止にも用ひられる。

「も」よりも指定性の多少軽いものに「でも」があり、極度に強力なものに「さへ」がある。何れも口語にのみ行はれ、結は常に終止形をとる。その中「でも」は賓格の助詞「で」に「も」の慣熟したもので、例へば

君でもよいから早く行つてやれ。

水でもよいから早くのませてくれ。

繪葉書をでも買はう。

誰にでもやる。何とでもおつしやい。

芝居へでも行かうか。筆ででも書ける。

使ふばかりでも駄目だ。

ついそこまですみ見送らう。

私などでもそのくらゐは出来る。

見るだけでもよい。

ござつぱりとでもしたらよい。

病氣が癒りでもしたらもう少しほがらかなれるだらう。

ほのめかしてでも置けばよかつたに。

の如きものである。「さへ」は「添へ」の意味を表し、文語では装定の助詞であるが、口語では係の助詞と見なければならぬのである。そこで例へば

これさへあればよい。

君さへ承知して呉れば外はどうでもよい。

お茶さへ下さればよろしい。

強くさへあればよいといふ譯でない。

行きさへすればよい。

の如く單獨に用ひられるもの、或は

あなたにさへ相談しないのですか。

これをさへ讀めないのか。

せうとさへ思へばいつでもできる。

伯父さんのところへさへまだ行つて居らぬ。

鉛筆でさへ書けぬ。

の如く一次的助詞の下に添へられるものの外に

君だけさへ承知すればそれでよいのだ。

君などさへしつかりして居ればこんなことにならなかつたのに。

何やらさへあればよいのだらう。

の如く、装定の助詞と重ね用ひられる場合は常にその下に置かれるのである。

以上は指定を主とするものであつたが、之に對して、指定以外に他の意味ある係の助詞には強調するものと疑問を表すものがある。前者は更に單に強調するものと咏嘆的に強調するものとに分れ、單に強調するものには常級的強調とも言ふべき「ぞ」と最大級的強調とも言ふべき「こそ」とがある。「ぞ」は係としては主に文語に用ひられその結は常に連體形をとる。例へば

其の勢決然として攻むべき様ぞなき。

春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき。(古今・一)

ゆきとまるをぞ宿とさだむる。(古今・十八)

花すゝき君がかたにぞなびくめる。(大和)

やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける。

八雲たつといふ出雲へぞ行く。(後拾遺)

あらがねのつちにしてはすさのをのみことよりぞおこりける。

ことをめにちかくだにぞみざりつる。(宇津保)

文王の子武王の弟とうちずし給へる御なのりさへぞげにめでたき。(源氏・賢木)

もしほやくけぶりとのみぞ見え渡りける。(後撰)

三位二位の袍染むる折ばかりぞ葉をだに人の見るめる。(枕)

おどろかるゝまでぞまもりまゐらす。(同)

さしもうけひかずなどぞおはする。(同)

長月のすぎゆく日をもしらずぞあらまし。(後撰)

あしからじよからむとてぞ別れけむ。拾遺・九)

山あゐもてする衣の赤ひもの長くぞ吾は神につかふる。(新勅撰・九)

ふる雪はかつぞけぬらし。(古今・六)

の如きものである。又この「ぞ」が疑問を表す語の下に添へられた場合には

汝何ぞ余が言を信ぜざる。

春雨にいかにぞ梅やにほふらむ。(後撰・一)

夢かともおもふべけれどねやはせしなにぞこゝろにわすれがたきは。(拾遺・十二)

の如く疑問的ともなる。口語では係として僅かに

つひぞ見たことがない。

どうぞかうぞせねばならぬ。

何ぞあるか。 誰ぞ来たか。

の如き用法があるだけである。しかし結に添へる終止的用法は口語文語共に盛に行はれる。その中

今日行くぞ。 なか／＼面白いぞ。

けれども急いでつまづくまいぞ。

空は晴れるらしいぞ。

とう／＼やつて来たぞ。

或は

惣門は錠のさゝれて候ふぞ。

さる事は我は知らぬぞ。

こは彼が書きたるぞ。

風はよきぞ。

の如きものは單なる終止的用法であり、文語では「ぞ」が連體形に添へられる。しかし上に疑問の語が来る場合には疑問的終止となるのであつて、之には

汝は何者なるぞ。

一人して二人の物をばいかでもつべきぞ。

の如く連體形に添へられる場合と

汝は何者ぞ。 あれは何の煙ぞ。

誰か美術問題を目して閑人の閑問題となすものぞ。

の如く實體語に添へられる場合とある。しかしてこの疑問的終止の用法は文語にのみ行はれ口語には普通行はれないのである。口語で稀に

誰ぞにやらう。 これぞといふ程の事もない。

何ぞの種にならう。 誰ぞのものだ。

などの如き言ひ方をするのは一種の慣熟體と見なければならぬ。

「ぞ」は「其」の字の義、「こそ」は「此」「其」の兩字を併せた義であると解かれてゐる如く、「こそ」は「ぞ」に比し強調力の極めて大なるものである。之は口語では

これこそ本ものである。

お前にこそ話さぬが大變なことになつたのである。

あなたをこそ頼りにして居りましたのに。

お前からこそ聞かぬがよく知つてゐる。

はつきりとこそせぬが見えぬことはない。

それでこそ男といふものだ。

知らせこそしたが来いとは言はなかつた。

今日までこそだまつてゐたがこれからは承知しない。

君らなどこそ大いにやつて呉れ。

誰やらこそ怪しい。

の如く終止形で結ばれるのであるが、文語では

こゝろこそうたてにくけれ。(古今・十五)

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ。(古今・三)

かくてもへぬるよにこそありけれ。(古今・五)

落ちて水の泡とこそなれ。(古今・二)

われも思はぬ方へこそ行け。(後拾遺)

關ちよりこそ月はいでけれ。(詞花)

たゞ我身のありさまからこそよるづのこと侍るめれ。(源氏・行幸)

ゆきてさへこそ見まくほしけれ。後撰)

聲ばかりこそむかしなりけれ。(古今・三)

なごりまでこそ袖はぬれけれ。(千載)

庭などいと蓬茂りなどこそせねど(枕)

川と見ながらえこそ渡らね。(古今・十三)

わざとこそくりはなつめれまがり木にはひまつはるゝ青つゞらをば。(夫木集)

年をへて菊の下水見てしより老といふことしらでこそふれ。(兼盛集)

あらばこそ初も果も思ほえぬ。(大和)

天地もよりてあれこそ、磐走る淡海の國の、衣手の田上山の、眞木さく檜の嬌手を、もののふの八十氏川に、

玉藻なす浮べ流せれ。(萬葉・一ノ五〇)

の如く、普通は已然形で結ばれるのである。しかし奈良朝時代頃までは形容詞系の陳述語で受けるものは

己が妻こそとこめづらしき。(萬葉・十一ノ二六五一)

野を廣み草こそ茂き。(同・十七ノ四〇一一)

の如く連體形で結ばれてゐた。又この「こそ」が終止點に用ひられる場合は

梅の花夢に語らくいたづらにあれをちらすな酒にうかべこそ。(萬葉・五ノ八五二)

現には逢ふよしもしなしねばたまの夜の夢にをづぎて見えこそ。(同・五ノ八〇七)

斯くしつゝ遊び飲みこそ。(同・六ノ九九五)

うち日さす都の人に告げまきは見し日の如く在りと告げこそ。(同・二十ノ四四七三)

の如く、連用形に添へられ願望の意を表す。しかしこの用法は、奈良朝時代以後にはないのである。

次に咏嘆的に強調する係の助詞は「なむ」であるが、之は文語にのみ行はれるものである。しかしてその結は常に連體形を以てせられ、例へば

その人かたちよりは心なむまさりたる。(伊勢)

大臣の御重ねて明き淨き心を以ちて仕へまつる事に依りてなも天つ日嗣は平らけく安らけくきこし召来る。(續

紀・十三詔)

ものしつればなむきこえずなりける。(宇津保・國譲下)

この世にうまれてこの事の時にあへるをなむ喜びぬる。(古今・序)

かの御ときよりこのかたとしはもとせまり世はとつぎになむなりにける。(同)

名をば讃岐の造磨となむいひける。(竹取)

平定文がもとよりなにはのかたへなむまかるといひおくりて侍りければ(後撰)

今よりなむ思ひ給へ知るべき。(源氏・櫛柱)

かたはらいたきまでかすまへのたまはすればまばゆくさへなむ。(同・若菜上)

の如きものである。又結に用ひられる場合は

小倉山嶺のもみち葉心あらば今一たびの御幸待たなむ。

山櫻ちりて深雪にまがひなばいづれか花と春にとはなむ。(新古今)

唐衣たつたの山も今よりはもみちながらにときはならなむ。(後撰)

吾妹子は劍にあらなむ左手の吾が奥の手にまきて去なましを。(萬葉・九ノ一七六六)

うち靡く春とも著くうぐひすは植木の木間を鳴き渡らなむ。(同・二十ノ四四九五)

の如く未然形に添へ希望を表す。

強調するものに對し、疑問を表す係の助詞は「や」「か」の二である。兩者は意義上差したる區別がないのであるが、一は緩長、他は急短である。(高等日本文法・五〇七頁照) しかして之等が係として用ひられるものは主として文語で、その場合は常に結が連體形をとるのである。例へば

尾上の月にさよやふけぬる。(新古今・五)

花なき里にすみやならへる。(古今・一)

みるめなきわがみをうらとしらねばやかれなであまの足たゆくくる。(古今・十三)

白妙の波路わけてや春はくる。(新勅撰・一)

わが黒髪をなですやありけむ。(後撰・十七)

わび人の袖をやかれし。(貫之集)

思ふことちえにやしげき。(千載・二)

一年をこぞとやいはむ今年とやいはむ。(古今・二)

もろともに西へや行くと月影の(金葉)

月はうき世の外よりや行く。(拾遺)

有様も人の程もひとしくだにやはある。(源氏・若菜下)

流れゆく水こほりぬる冬さへや猶うきくさのあととはとどめぬ。(後撰・八)

見てのみやたちくらしてむ。(貫之集)

驚の啼くをりのみや思ひ出づべき。(大和)

針目までやは見とほしつる。(枕)

このへんもてくるにはものなどやとらすらむ。(枕)

或は

なに人かきてぬぎかけし藤ばかりま(古今・四)

行末をたれしのべとか夕風にちぎりかおかむ宿のたちはな。(新古今・三)

かぐや姫のいはく、なでふさる事かし待らむ。(竹取)

沫をか玉のきゆと見ゆらむ。(古今・十)

あふみにかありといふなるみくりくる人くるしめのつくま江の沼。(後撰・十一)

いづれを先に戀ひむとか見し。(古今・十六)

新羅へか家にかかへる。(萬葉・十五ノ三六九六)

たが里よりか匂ひきつらむ。(新古今・一)

いかばかりかやすからざるべき。(狭衣)

いつまでか野邊に心のあくがれむ。(古今・二)

などの如くである。口語でも「や」には

露や時雨が色よく染めた。

ちよつとやそつとの事ではない。

の如きものがあり、「か」には

君か僕かさへ承知すればできるのだ。」

讀みか書きかする。

梅か桃をくれ。

或は

誰かするだらう。 幾つか買はう。

誰にかやらう。 何とかしよう。

どれかにきめよう。 どこから來た。

の如きものがあるが、々々等は係として用ひられてゐるといふよりも、寧ろ並列の助詞、或は装定の助詞の方向に轉移しつゝあるものと考へなければならぬのである。又「や」「か」共に結に添へられ、疑問斷止を形造り疑問文を成立せしめるのである。その中「や」は文語にのみ用ひられ、その場合

わが思ふ人はありやなしやと。

おのがすむ野の花としらずや。

むなしき名のみたつときききや。

更に筆を投げつべしや。

の如く終止形に添へられる。「か」は口語文語共に行はれ、しかして

何處へ行くか。もう一度見ようか。

それでよいと思ふか。昨日だつたかね。

さやうでござりましたか。

それで追付く話か。昨日來たのは君か。

何處へ行くのか。もう出來たのか。

或は

我が身ひとつのためになれるか

絶えぬるか影だに見えたとふべきを。

きりぎりす夜寒に秋のなるまゝによわるか聲のとほざかりゆく。

雲か山か哭か越か。

秋風のふき上げにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか。

の如く連體形、或は實體語乃至準體的な語に添へられる。

以上は總て指定的の係助詞であるが、之に對して、極めて特殊なものであるが禁制的な「なそ」格がある。しかし「なそ」格は古い文語に於てのみ用ひられるもので、今日の口語は勿論のこと、文語でも普通は終止形（良變

は連體形」に「な」を添へる禁制的終止の方法をとる。しかし、かやうな「な」が係の助詞と考へらるべき所以のものは、矢張「なそ」格として「な」が結に對する係となつて働く點にあるのであるから、「な」の本質を知らんがためには、どうしても「なそ」格から考察して行かねばならぬのである。「な」が係に立つ場合には、四段系活用及び二段活用では連用形を以て之を受け、三段活用では未然形を以て之を受け、而してそれらに「そ」を添へて結ぶのである。例へば

みづから侍るとな人にゆめ／＼知らせ給ひそ。(宇治拾遺)

あたりよりだになありきそ。(竹取)

ふきなちらしそ。

いたくなわびそ。物思ふ我に聲なきかせそ。

ふく風をなこそ關と思へども。

見とがむべき事なせそ。

の如きものである。しかし更に古いものでは

吾大君ものなおもほし。萬葉・一ノ七七)

木の間よりいでくる月に雲なたなびき。(同・七ノ一〇八五)

父母もうへはなさかり。(同・五ノ九〇四)

吾なしとな侘び。(同・十七ノ三九九七)

の如く「そ」を添へないものもある。かやうな「な」が述素の末端に來たものが

一度聞いたら決して忘れるな。

生意氣言ふな。 もう來るな。

そんなやかましい議論はもうするな。

或は

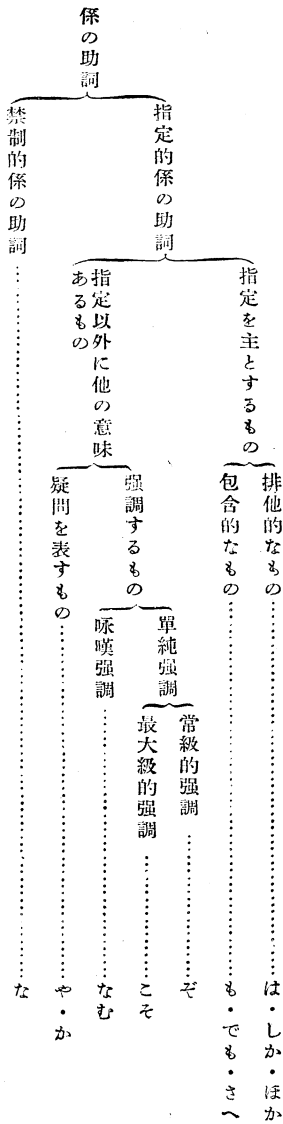
汝過ちすな。 人に語るな。

吾が庭に生ふる土針心ゆも想はぬ人の衣に摺らゆな。

龍の首の玉とり得ずばかへりくな。

の如き斷止的用法である。

以上述べた係の助詞は略々次の如きものである。



しかして文語に於ては、それが結の述素と左の如き呼應關係があるのである。

係の助詞	結の述素
は・も	終止形
や・かな・む	連體形
こそ	已然形
な	連用形 (三段では未然)

七

間投の助詞と係の助詞とは文の成立に關する助詞であつたが、裝定の助詞は句の成立に關係する助詞である。しかし、兩者は共に二次的助詞である點に於て類同的なものでなければならぬ。言語の斷止連續に直接的に關係し文や句を成立せしめる一義的な助詞ではなく、かゝる斷續相に間接的に影響を及ぼし、文や句の成立に對し扮飾を加へて行く二義的な助詞であるといふ點に於て、兩者は相一致するものであると言はなければならぬ。随つて裝定の

助詞と雖も一面から見れば間投的性格を有してゐるのである。修飾關係、補充關係、統合關係、並列關係等句成立の相關々係ならば、何れにもよく介入し、節形成の文要素となり得るものである。しかしそれは句間にのみ介入せしめ得るものであつて、文末に来ることがないのである。省略述法の如きものは別として普通の場合に於ては絶對に句の外に出ることの出来ない助詞である。そこに間投的性格への大きな制限があるのである。之が句の成立に關する装定の助詞の第一の特質である。次に係の助詞は連體的な關係内に介入することができないものであつた。それは陳述機構の上に成立せるものとしては當然なことである。係の助詞は常に述素の係として働かなければならぬものであるから、その置かれる地點は連用的でなければならぬのである。然るにこの装定の助詞は

こればかりの心配 京までの道中

君などのおせつかい 言ふだけの事

痛いぐらゐの辛抱 何かの間違

今日のみの樂しみ

これだけとそれだけを加へる。

の如く、連體的な關係内にも介入することができる。この點係の助詞に比し間投的に幾らか緩びのあるものと見なければならぬ。即ち係の助詞が句の外に出ることができる點は、装定の助詞に比しより間投的であると言ふことができるが、装定の助詞が連體的なものに介入し得る點は、係の助詞に比しより間投的であるといふことが出来るのである。之が装定の助詞の第二の特質である。次に嚮にも述べたやうに係の助詞と装定の助詞とが相互に重なる

場合には、この装定の助詞は常に先行的である。そのみならず、一次的助詞と重なる場合に於てすら

こればかりの事　それぐらゐのこと

そこまでの決心　こゝだけの話

名のみの主

そればかりが心配です。　人々の心までが總立ちになつた。

君などが知らぬ事だ。　あれだけが缺點だ。

これぐらゐが關の山だ。

行先ばかりを考へる。　十日までを限る。

三等ぐらゐを望む。　二人分だけをとる。

あの人などを友達にしたらよい。

世の中はねてもさめても夢ならばわすれぬさへをわするとやせむ。

今こむといひしばかりを命にてまつにけぬべしさくさめのとじ。

人ばかりにたよる。　これまでにする。

友達などに話す程の事でもない。

仲間だけに見せる。　親類ぐらゐに話してもよからう。

彼の善行はこれのみに止まらず。

秋風膚寒きまでになりぬ。

道すらにしぐれにあひぬ。

色さへにこそうつろひにけれ。

子供などと話す。 明日までときめる。

どのくらゐといつて一寸いひにくし。

三つや四つなどではおつつかない。

そればかりで澤山だ。 三日ぐらゐでできる。

それだけで結構です。 そこまででよろしい。

などの如く矢張先行することができるのである。故に装定の助詞は節の文法的構造に於ては第一次的助詞の前後を比較的自由に潜り抜けて働き得る助詞と考へてよいのである。之が装定の助詞の第三の特質である。

以上で装定の助詞といふものの特質を概略説明したから次にその内容につき考察を加へてみよう。先づ之を大別して、確定的のものと未定的のものとに分ける。確定的のものには、特にそれを明示せんとするものと、漠然とそれを汎示せんとするものとがある。前者には又、副次的なものを擧げることによつて、本質的なものを類推せしめんとするものと、それに只管限定せんとするものとある。類推的なものには更に、添加的なものを擧げ示し本來的のものを類推せしめんとするものと、輕きものを擧げ示し重きものを類推せしめんとするものとある。前者は

春雨に匂へる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花。(古今・二)

よになくきよらなる玉のをのこみこさへうまれ給ひぬ。(源氏・桐壺)

みたてまつる人さへ露けき秋なり。(同)

夜さへ見よと照す月影。

御頭巾さへ召し給ふ。

の如き文語の「さへ」であり、後者は「だに」と「すら」とである。しかして「だに」は

皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よかはきだにせよ。(古今・十六)

はかなきことだにかくこそ侍れ。(源氏・帚木)

母君なくてだにらうたうし給へ。(同・桐壺)

今日だにいひがたし。まして後には如何ならむ。

の如く、挙げ示した軽きものに注點を置き、類推せらるゝ重きものを暫く顧みようとしないのであり、「すら」は

雪消する山道すらをなづみぞわが來し。(萬葉・三ノ三八二)

草木すら春にはなべて逢坂の(躬恒集)

鬼すらも都の内と簑笠をぬぎてや今宵人に見ゆらむ。(同)

とけてすらぬる程もなき……

の如く挙げ示した軽きものにより重きものを類推せんとするものである。以上「さへ」「だに」「すら」の類推的裝定の助詞は文語にのみ行はれるものである。

類推的装定の助詞に對する限定的装定の助詞には事物的限定のものと範圍的限定のものとある。前者には更に單純的限定と特立的限定とがある。單純的限定のものは「だけ」であるが、之には

君だけに見せる。 友達にだけ話す。

見るだけは見せる。 これだけで勘辨してくれ。

の如く事物そのものを限定する場合と

三つだけあげる。 それだけでよいか。

家の高さだけ積み上げる。

ほめられるだけの値打はある。

の如く事物の程度について限定する場合とある。特立的限定のものは「ばかり」と「のみ」とであるが、その中

「ばかり」は

雨ばかり降つてゐる。 人をばかり當にしてゐる。

こゝばかりの事ではない。 綺麗なばかりで品は悪い。

今年ばかりは墨染に咲け。

打ちつけにこしとや花の色をみむおく白露のそむるばかりを。(古今・十)

御脊をとらぬばかりにし給ふ。(源氏・紅葉賀)

の如く區別的であり、「のみ」は

今のみのわざにはあらず。(萬葉四ノ四九八)

御胸のみつとふさがりて(源氏・桐壺)

沖つ浪荒のみまさる宮の内は(古今・十九)

海とのみ圓居の中はなりぬめり。

の如く唯一的である。範圍を限定するものは「まで」であるが、之には、

下關まで汽車で行つた。

こゝまでは僕の分だ。

明日まで待つて呉れ。

ろくに知らぬ人にまで案内狀を出したさうだ。

つれもなき人の心の關守はゆめぢまでこそゆるさゞりけれ。(風雅集)

折よくば見に來ぬまでも我宿の櫻さきぬとつけましものを。(和泉式部集)

死ぬまで學ばむ。 宰相までなり給ふ。

の如き用法の外に、口語では文語の「さへ」のやうに、本來的のものの上に更に添加するものを示すことがある。
例へば

年寄まで騒ぎ出す。

逆境に立つと親類にまでうとんぜられる。

死なうとまで思つた。

の如きものである。

以上の如き特示的装定の助詞に對する汎示的装定の助詞には、事例的なものと概略的なものとある。前者は「など」で、例へば

もう月などあるものか。

知らないなどと言はせぬぞ。

水でなど洗つて來い。

親兄弟などに話す。

或は

いにしへゆくさきのことどもなどいひて（伊勢）

おぼえある人の子どもなどは雑色などおりて馬の口などしてをかし。（枕）

除目の程など内裏わたりはいとをかし。雨ふりこほりなどしたるに申文もてありく。（同）

京になど迎へたまひて後

これかれいと情なしあまりなりなどものすれば

の如く口語文語共に用ひられ、後者は「ぐらゐ」で、例へば

これぐらゐの事は何でもない。

すこしぐらゐ見せてもよからう。

あの人とぐらゐ取組まれよう。

三圓ぐらゐあればよい。

の如く口語にのみ用ひられる。又「ばかり」が

曉ばかりうきものはなし。

死ぬばかり思ふ。泣きぬばかりにいふ。

或は

三圓ばかり貸して呉れ。

十時間ばかりかゝる筈です。

これッばかりしも心配せぬ。

の如く、略々この「ぐらゐ」に似通つた意味に用ひられることもある。

以上は確定的のものであつたが、之に對して未定的に裝定する助詞がある。その中、想像的のものと疑問的のものとが先づ區別せられる。前者には更に遲疑的のものと期待的のものとがある。遲疑的裝定を爲す助詞は「やらん」から變化して來た「やら」である。例へば

田川とやら言つたつけ。

大阪へやら行くさうだ。

慥かやら慥かでないやはつきりしない。

の如く口語に行はれるのである。しかして之は連體的並列にも用ひられ遲疑的枚擧となる。期待的裝定を爲す助詞は「がな」であるが、之は希望文の成立素が間投化したものと見なければならぬ。例へば

何があるだらう。 芝居にがな行かう。

或は

さらむ人をがな使はむとこそおぼゆれ。

なほよからむ敵がな組んで今一人首取らむ。

の如く口語文語共に行はれてゐる。疑問裝定をなす助詞は文語の係の助詞から轉移した「か」である。例へば

誰か居るだらう。

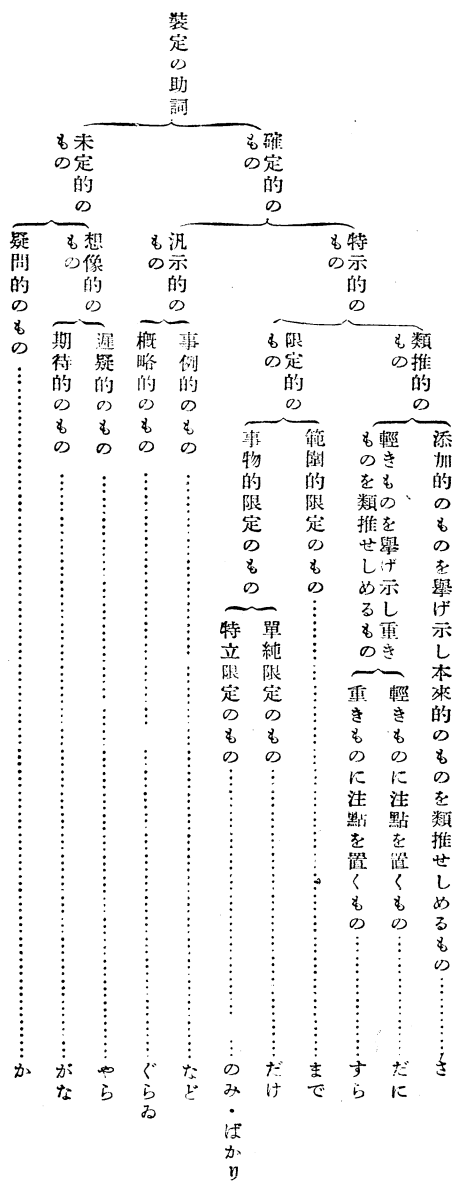
どれかにしよう。

いくらかよい。

どこかで逢つた。

吉川とかいふ人

の如く用ひられ勿論口語にのみ行はれるものである。



八

私はこの論説に於て助詞の本質及びその内容の概略を考察してみたのであるが、勿論不完全極まるものであつたかも知れない。しかし、従来は助詞を贅辭とか體辭などと稱し、活用を有する助動詞に對して不變化形態の文法語の如く考へられてゐたのであるが、かやうな考へ方では到底助詞の本質を把握することができないと思ふ。と同時にそれは助動詞の本質をも暗くするものといはなければならぬ。助詞は之を助動詞と對立せしめ、活用があるとか

ないとかといふことを云々する前に、活用現象そのものと對立させて考へて行かなければならぬのである。勿論助詞は活用の如く自動的内生的のものではなく、添着的外附的のものであり、随つて活用現象を一次的と考へれば助詞は二次的なものと考へなければならぬ。その次元を異にするものである。しかし、助詞は活用と共に立言の眞の要素となる節を形成する形態素であることを忘れてはならぬ。文や句を成立せしめることを任とする文法語であることを見失つてはならぬ。助詞は、それに活用があるとかないとかといふやうなことは第二義的な問題で、それよりも成語的な助動詞などとは異なり、文を成し句を構へるための成節素である。しかし、それには直接的なものと同接的なもの、或は本體的のものと副次的のものとある。こゝに一次的助詞と二次的助詞とを立てるのである。前者は、勿論之を仔細に觀察すれば種々の意義内容を有してゐるのであるが、その主眼とするところは文を成し句を構へるための助詞であり、後者はかゝる文を成し句を構へんとする力點に位置することによつて、之を粉飾し曲折せしめるものである。斯くてこの兩者には種々のものが區別せられ、助詞組織の複雑な内容を成してゐるのである。

一體、日本語の助詞は明確に分れる二つの方面から考察されなければならぬ。それは一次的助詞に視點を置く研究と、二次的助詞に視點を置く研究とである。前者は明治以來の西洋文典流入の結果として漸次發展し現在に至つてゐるものであるが、後者は歌學的文法乃至は國學的文法に於て發展したものである。一次的助詞に視點を置く研究とは如何なるものであるか。それは文や句の成立に關する言語の斷續に於ける助詞の考察であつて、上來行つて來た如き方法がそれである。即ち論理的な文法機構として助詞内容を組織立てるのである。助詞の論理的考察である。

之に對する二次的助詞に視點を置く研究とは如何なるものであるか。それに就いては、この論說に於て餘り觸れなかつたのであるが、審美的文法機構としての助詞考察ともいふべきものである。つまり言語の斷止連續の論理的機構そのものを餘り問題とすることなく、かゝる論理的機構を曲折せしめ粉飾する文法事實を只管問題として行かうとするものである。しかし二次的助詞に視點を置くと言つても、本居宣長の玉の緒研究はその最も高度に發展したものを對象としたものであつた。即ち係の助詞を主として考察したのであつた。勿論、係の助詞を發見し之が眞義を究めたことが、宣長をして文法學史上あの偉大な業績を残さしめたのであるが、併し單にそれだけでは、この種の文法機構に關する規範文典しか生れないのである。眞に審美的文法機構の科學的體系を立てんがためには、かゝる係結的考察を更に超え、間投の助詞の如きものに至り、文法語の間投性乃至は二次的性格といふものを深く究めてかゝらなければならぬのである。富士谷成章の脚結研究は現在の目を以てすれば幾多非議すべき點があるであらうし、又その中に論理的考察が多分に介入してゐるのであるが、助詞を間投的性格より檢討してゐる點に於て最も注目すべきものであると思ふ。即ち脚結抄の五屬と稱するものは、大體は於て文成立に關係ある助詞と思惟するものを集め、十九家と稱するものは句成立に關係ある助詞と思惟するものを集めたものである。しかしてそれは、詞の切れとかつゞきとかを直接に成立せしめるものとして各種の助詞を檢討したものではなく、かゝる切れやつゞきの成立に對し、それ／＼の助詞が何等かの影響を與へ、變曲せしめるものとして考察を加へたものである。かくて係結關係の如きものはその研究の各所に散在し、未だ一類の助詞に集約されてゐないのである。もしそこへ、宣長の玉の緒研究の如きものが加はつて行つたら、成章の脚結抄は殆んど完全無缺の組織を持つに至つたのではないか。

と思ふ。

一次的助詞と二次的助詞との識別に就いては數萬言を費やすも尙足りとしなう。それは助詞の内容検討の第一原理ともいふべきものであり、更に論理的文法機構と審美的文法機構との接點である。約言すれば、前者は斷續的であり後者は間投的である。一はロゴスのであり他はパトスのである。しかしてロゴスの斷續の種々相により一次的助詞が様々に相分れ、パトスの間投の緩急長短により二次的助詞が種々に類別せられるのである。しかし節の文法的構造を外附的に形成するものとして兩者は軌を一にするものでなければならぬ。前者は固着的であり、より活用に近きものであり、後者は離接的であり、所謂縫目の如く隱顯するものであるが、活用と共に成節の形質たるに於ては同様のものでなければならぬ。個々の助詞は、終止形とか連體形とか連用形とかといふ個々の活用形に比せらるべきものである。そこに助詞は不活用的辭辭である所以のものがある。不活用的なるが故に助詞であるのではなく、助詞なるが故に不活用的なのである。